

静岡県埋蔵文化財センター

# 研究紀要

第4号

2015

## 論文

縹構造をもつ堅穴系埋葬施設の一様相 ..... (1)

田村 隆太郎

遠江・駿河の鎌について

—藤枝市寺家前遺跡出土の柄付鎌の評価をめぐって— ..... (15)

大谷 宏治



# 序

静岡県埋蔵文化財センターは、平成23年4月の発足から平成27年度で5年目を迎えました。

県民の歴史的・文化的資産である文化財を保護し（守る）、地域固有の文化に対する誇りと愛着をもつ県民意識を醸成し（育てる）、文化財の価値を未来へ継承する（つなげる）。この「守る・育てる・つなげる」をコンセプトとして、当センターは、公共事業に伴う発掘調査と資料整理、出土品及び記録類の管理、埋蔵文化財を用いた普及公開活動に取り組んでおります。

平成26年度のセンターの調査業務に目を向けると、太田川の河川改修工事に伴う袋井市西向遺跡と富里遺跡では、奈良時代の建物群が確認され、県民の皆様に向けて現地説明会を開催いたしました。また、海戸田遺跡、東田遺跡、立道遺跡、ミカノセ遺跡の発掘調査報告書を刊行いたしました。

一方、普及公開活動では、ムセイオン静岡や他機関との連携による展示や講演会、体験活動などを推し進めております。特に、県立中央図書館内では、埋蔵文化財センター常設展示「古代からの贈り物～発掘調査から知る静岡県の歴史～」において、これまで30年近くに渡って蓄積された資料を広く公開しております。また、25年度から県内の博物館などと協力して行っている巡回展については、26年度は伊東市文化財管理センター、三島市郷土資料館、登呂博物館と共に「弥生スタイル」を開催し、多くの皆さんに見学いただきました。今後も、発掘調査の成果を県民の皆様に広くお伝えできるよう努力してまいります。

さて、研究紀要も第4号を刊行することとなり、主に弥生時代～古墳時代の論文を2編収録することができました。研究紀要是、当センターの職員が日常業務と並行しながら、専門分野における研究活動の一端を発表するものであり、当センターの情報発信の一つの柱でもあります。

日頃の調査業務をはじめ、今回の研究活動に御理解・御協力いただいた方々に厚くお礼申し上げますとともに、本書が広く活用され、歴史、文化に関わる研究に資することができれば幸いです。

平成27年11月

静岡県埋蔵文化財センター所長 赤石 達彦

## 目 次

序 ..... 赤石 達彦

### 論 文

◇礫構造をもつ竪穴系埋葬施設の一様相 ..... 田村 隆太郎 (1)

◇遠江・駿河の鎌について

—藤枝市寺家前遺跡出土の柄付鎌の評価をめぐって— 大谷 宏治 (15)

# 礫構造をもつ堅穴系埋葬施設の一様相

田村 隆太郎

**要旨** 古墳時代中期前葉に位置づけられる静岡県菊川市八幡ヶ谷古墳について、礫床（砂利敷き）を伴う埋葬施設に注目し、その評価を検討した。類例は駿河西部の志太地域に認められ、埋葬施設の構造および古墳の立地などの共通性から、前期後葉～中期前葉における「礫床をもつ木棺直葬」の展開を評価した。また、遠江の磐田原台地では前期初頭以前から、その周辺（遠江中・東部）や志太地域でも前期から礫構造をもつ堅穴系埋葬施設が中・小規模墳に認められ、さらに、前方後円墳では礫床と粘土を用いた構造が認められることから、これらを含めた系譜的連関と展開を評価した。

キーワード：古墳時代前期～中期前葉 遠江中・東部 志太地域 坚穴系埋葬施設 磕構造 矽床

## 1はじめに

静岡県西部の菊川市には、県内3例目の巴形銅器などが出土した八幡ヶ谷古墳が位置する。遠江の南東部において太平洋へと南流する菊川の流域、その平野の東側丘陵に立地する古墳であり、平成19年に道路建設に先立って発掘調査が実施され、平成21年には調査報告書が刊行された（静岡県2009）。

この調査では、同じ丘陵に立地する古墳時代中期の円墳3基（八幡ヶ谷古墳、瑞泉寺1号墳、志味堂1号墳）が調査されたが、八幡ヶ谷古墳は他の2基より規模が大きく、最も古い時期に位置づけられる（註1）。さらに、埋葬施設の規模や深さも際立っており、礫敷き（砂利）など他にない構造も伴っていた。筆者は調査担当者ではなかったが、現地の発掘や出土遺物の実測などにおいて、この遺構と遺物にふれる機会をいただいている。そこで、本稿ではその礫敷き（砂利）の埋葬施設に注目し、評価を考えたい。

## 2八幡ヶ谷古墳の概要

**立地と環境（図1）** この古墳は、南にのびる丘陵尾根に立地する。同じ丘陵の北側には、瑞泉寺古墳群と志味堂古墳群が分布するが、南側は八幡ヶ谷古墳を境に尾根が低狭になる。したがって、この古墳は丘陵尾根のうち、高所域の先端として意識される場所に築造されたと評価する

こともできる。

丘陵の西側には、菊川流域の平野を望むことができる。その中でも、八幡ヶ谷古墳は谷筋を介して上平川大塚古墳（1号墳）が見える場所に位置している。上平川大塚古墳は既に消滅しているが、前期後葉に位置づけられる墳長30m前後の前方後円墳であり、三角縁神獣鏡などが出土している（西郷2010、大谷2010）。

**墳丘（図2）** 墳丘は径約21mの円形であるが、南側の基壇状部分を含めると径約24mになる。検出した約3mの高さは、尾根の削り出しによってつくられた



図1 八幡ヶ谷古墳の位置と立地

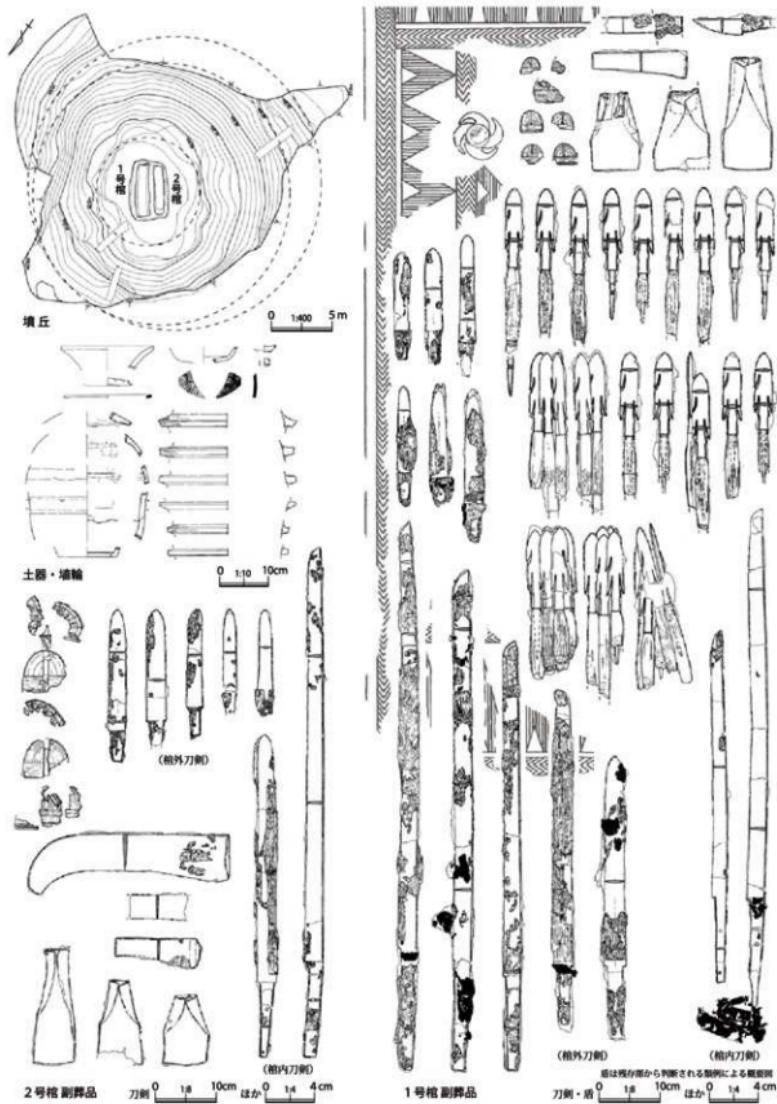


図2 八幡ヶ谷古墳の概要

いた。したがって、盛土は極めて少なかったと推測できる。葺石は認められなかつたが、埴輪の破片が埴丘周囲と墳頂の墓壙覆土中から出土している。

**埋葬施設**（図3） 墳頂部の中央に墓壙が発見され、その中に並列する2基の木棺直葬（1・2号棺）が検出されている（註2）。墓壙覆土の土層断面からは、2号棺の埋葬が先に行われた可能性が指摘できる。しかし、明瞭な切り合い関係ではなく、同一墓壙内の埋納順を示しているように観察できた。なお、墓壙の比較的深い位置からも埴輪片が出土していることから、2

基の埋葬において埴輪片が混在する過程があったと判断できる。

埋葬施設の主軸（頭位）は、いずれも南東方向にある。尾根の方向とは斜交するが、眺望のある谷筋に対して横位置になる。墓壙は約5.0m×3.2mの平面方形、深さ約0.5mである。北東側の1号棺は約4.2m×1.1mの平面方形で深さ約0.6mの断面箱形、南西側の2号棺は約3.9m×0.8mの平面方形で深さ約0.3mの断面箱形である。底面は、1号棺が約4.1m×0.7m、2号棺が約3.5m×0.7mである。

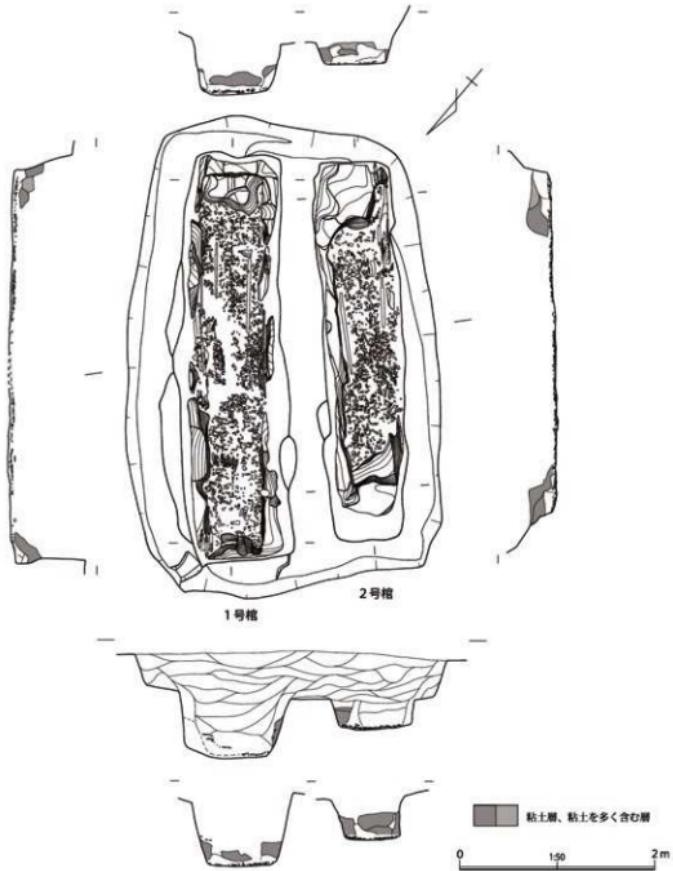


図3 八幡ヶ谷古墳の埋葬施設

なお、同じ尾根に立地する中期後葉の瑞泉寺1号墳でも、2基の木棺直葬が並列する。しかし、同一墓壙ではない。また、八幡ヶ谷古墳の埋葬施設は、泥岩・砂岩層を深く掘り込んで設けられており、後述する礫と粘土の構造のほか、この点も瑞泉寺1号墳などにはない特徴として指摘できる。

2基の木棺直葬は、基本的に同じ構造をもつ。底面は概ね平坦であり、全域に小さな礫（砂利）が敷かれている（註3）。周縁には粘土が認められ、これらの検出状況から、組合式の箱形木棺が設置されていたと判断することができる。なお、礫床に側板や仕切板に関わる造作は認められなかったが、2号棺の北西部の礫床において、木棺の痕跡と思われる僅かな段差を観察している（註4）。また、1号棺の小口壁においては、木棺の側板の端が入り込んでいた可能性が指摘できる凹みが認められている。

粘土は、木棺部分の周囲全体に認められる。ただし、1号棺では、ある程度の埋土をした上に粘土が施されていることから、木棺を覆うような構造ではなく、一定の高さに粘土面を設けることによって、埋葬・儀礼上の段階面を意図した可能性が考慮される。一方、小口部では粘土が厚く、木棺上に被覆した粘土も認めることができる。2号棺では棺外副葬品（鉄劍）の上に粘土が及んでいることから、副葬儀礼後の粘土被覆として把握することもできる。

粘土に囲まれた範囲は、1号棺が長さ3.8m程、幅0.5~0.6m、2号棺が長さ2.5m程、幅0.4~0.6mであり、いずれも頭位側が幅広になる。また、先述した2号棺北西部の礫床の段差は、粘土の内法と位置が一致する。

副葬品（図2）1号棺では、棺内に堅櫛3以上、鉄刀2、鉄鎌37、刀子1、直刃鎌2、袋状鉄斧3、棺外に鉄刀3、鉄劍8、巴形銅器1、盾（漆）1が副葬されていた。2号棺では、棺内に複合堅櫛3以上、鉄刀1、鉄劍1、曲刃鎌1、直刃鎌2、袋状鉄斧3、棺外に鉄劍5が副葬されていた。

1・2号棺の棺外にある短い鉄劍については、長さや出土位置からヤリ先の可能性も指摘できる。ただし、装具にヤリである根拠を得ることはできなかった（註5）。また、1号棺の巴形銅器と盾は、左右離れた位置から出土していることから、装着されていたとは断定できない。1号棺の鉄鎌は、二段逆刺（上段片逆刺）鎌の同種多量の束である。刀劍は、漆塗の木製装具が一部残存しており、楔形把頭や直弧文の把縁が認めら

れるものもある。農工具は、大きさや造りから非実用品の可能性が指摘できるが、2号棺の曲刃鎌は比較的大きく、副葬位置からも異なる性格が考慮される。

本墳の埋葬時期は、主に鉄鎌などの副葬品の特徴から中期初頭～前葉に位置づけることができる。

### 3 埋葬施設の特徴に関する検討

八幡ヶ谷古墳の埋葬施設は、同一墓壙内の二棺併葬であることに加えて、組合式の箱形木棺の直葬であり、棺周囲の粘土の使用、礫床といった構造の特徴をあげることができる。

#### （1）諸特徴に関する周辺地域の状況

**二棺併葬** 周辺地域（遠江・駿河）をみると、複数の埋葬施設が並ぶ古墳は少なくなく、木棺直葬であれば地域や時期、または古墳の規模を問わず確認することができる。しかし、同一墓壙の二棺併葬は少なく、明確なものとしては、焼津市小深田西1号墳、藤枝市秋合6号墳、同11号墳、磐田市磐田67号墳、森町文殊堂8号墳をあげることができる（図4、註6）。

小深田西1号墳は、駿河西部の志太平野に立地する一辺10m強の方墳である。併葬する内の南側の第1主体部には、舟形木棺を推測させる痕跡が認められている。鏡や玉類の副葬と土器の出土があり、前期中葉に位置づけられる（焼津市1984）。秋合古墳群は、志太平野の北西丘陵に立地する。6号墳は径15mの円墳、11号墳は一辺約10mの方墳であり、いずれも箱形木棺と判断される直葬2基が並ぶ。11号墳は周溝等から出土した土器から前期に位置づけられており、6号墳も調査報告書では中期に位置づけられていたが、遡る可能性が指摘されている（藤枝市1980・2007）。磐田67号墳は、磐田原台地西縁に位置する。中期中葉頃の徑約18mの円墳であり、断面箱形の木棺直葬2基が並ぶ。鋳造鉄斧や鈴といった特徴的な副葬品がある（磐田市1977）。文殊堂8号墳も中期中葉の徑約16mの円墳であり、古墳群形成開始の築造に位置づけられる。片鏽造りの短頭鎌などの副葬のほか、荆竹形木棺の小口には粘土が用いられ、棺床には礫を充填した小土坑を伴うといった特徴がある（静岡県2008）。

以上のように、同一墓壙の二棺併葬については、八幡ヶ谷古墳を含めて中期中葉以前にあり、中・小規模の円・方墳に認められる状況にあると把握することができる（註7）。

**木棺形態と粘土の使用** 木棺には割り貫き式の割竹形木棺、組合式の箱形木棺などの構造および形態の種類があり、さらに詳細な分類研究も進んでいる。しかし、木の棺材が残っている場合は極めて少なく、多くの古墳では、主に棺床の断面によって木棺の形態等を判断している。

古墳時代の木棺については、岡林孝作によつてコウヤマキ材を選択的に使用する近畿を中心とした地域圏が把握され、前期の舟形木棺から割竹形木棺、中期以降の組合式木棺の卓越が指摘されている。さらに、この地域圏の外側では樹種に多様性があり、在地墓制と近畿周辺から波及した形態が重層しながら「地域性豊かな棺の多様性を示す」と評価している（岡林2011）。遠江・駿河は、この地域圏の境界域にあたる。弥生時代以来の墓制では箱形木棺が主流であり、割竹形木棺は前期において後出的に認められるようになるが、その後も地域によって双方が認められ、混在する古墳群もある。また、後述する粘土や礫による構造上の諸要素においても、いずれかの木棺形態に偏る傾向はあるものの、必ずしも限定されるわけではない状況が確認できる（註8）。

粘土の使用について、とくに遠江では、割竹形木棺の小口に粘土を施した木棺直葬が多く確認できる。しかし、前期後葉の浜松市馬場平古墳（墳長約48mの前方後円墳）では、箱形木棺に粘土帯に類する構造をも

ち（引佐町1983）、中期末葉～後期前葉の袋井市愛野向山B12号墳（径約8mの円墳）や袋井市高尾向山3号墳（径約10mの円墳）でも、箱形木棺の周囲に粘土を施している（袋井市1996・2004）。なお、愛野向山B12号墳では、木棺の周囲に礫を多用した別の埋葬施設が並列している。また、高尾向山3号墳では、小口に礫も使用されており、粘土と礫の使用は併用されることが確認できる。

**礫の使用** 磨の使用については、礫積みの竪穴式石室などがあるほか、箱形木棺の棺側に礫を並べる場合、割竹形木棺の小口に用いる場合などが比較的多く確認できる。さらに、棺上に礫を施すものなども少数ながら確認されており、前期から後期前葉にかけて多様な利用をみせる。

こうした中で、遠江では浜松市辻田平古墳群や袋井市雲座D1号墳、袋井市若作C1号墳、菊川市寺の谷3号墳などに礫床を認めることができる（浜北市2000、袋井市1972・1990、小笠町1991）。その中でも、寺の谷3号墳は八幡ヶ谷古墳と同じ菊川流域の地域であり、粘土床に礫を敷くという特徴的な構造や埴輪を伴う点が注目される。しかし、いずれも中期後葉以降の小規模墳であり、用いられる礫は砂利ではない。

その一方で、駿河西部の志太平野の地域（志太地域）では、八幡ヶ谷古墳との類似が指摘できる礫床の木棺直葬を確認することができる。

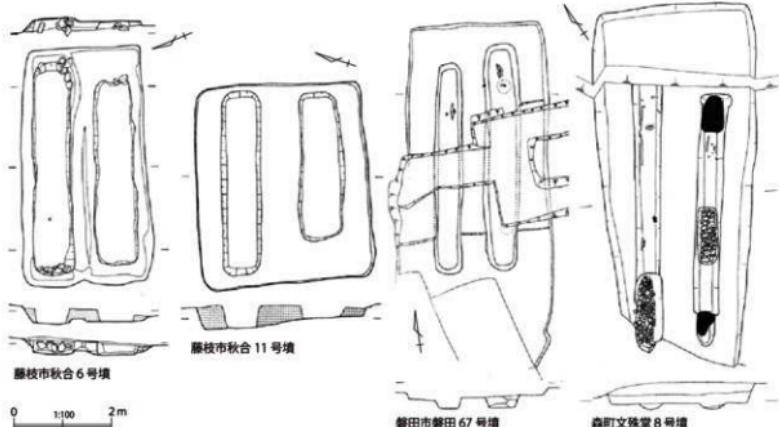


図4 遠江・駿河の二棺併葬（同一墓壙）

## (2) 志太地域の砾床をもつ木棺直葬

志太地域は、前・中期をとおして前方後円（方）墳が認められず、比較的小規模な円・方墳が展開する特徴的な地域である。瀧沢誠は、この志太地域における前・中期の小型墳について研究し、次のように成果を明らかにしている（瀧沢2003）。

瀧沢氏は、古墳・古墳群の存在形態の変遷を整理したうえで、前期前葉における箱形木棺の長大化、前期後葉に出現する割竹形木棺と箱形木棺との関係のほか、棺床の小土坑や土器の副葬といった埋葬施設の特徴について全国の事例や研究史を含めて検討し、その背景として、伊勢や近畿との交流関係の様相を指摘している。さらに、砾の使用をa～e類（a類：棺周囲、b類：棺側、c類：棺床と棺周囲、d類：棺床、e類：棺小口）に分類し、e類は割竹形木棺や長大な箱形木棺と関係すること、a・b類とd類とは直列の系譜関係では理解できないことなどを指摘している。そして、磐田市竹之内原1号墳や磐田市新豊院山2号墳の存在もふまえて、「典型的な堅穴式石室の導入に先駆けて砾を使用した埋葬施設が遠江・駿河地域に展開し、そのいくつかの流れを汲む埋葬施設が前期後葉以降に営ま

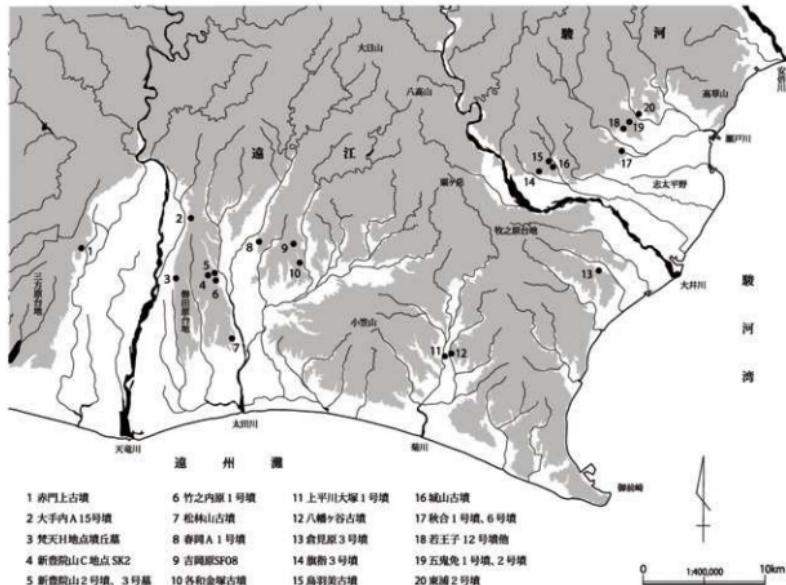
れた志太平野の小型墳にも引き継ぎ採用された」との見方を示している。

八幡ヶ谷古墳の砾床をもつ木棺直葬については、瀧沢氏の分類におけるc・d類に類例を求めることができる。そこで、この諸例について、調査報告書等の刊行物と調査資料の閲覧により得た概要を報告する（註9、図5・6）。

**島田市鳥羽美古墳**（図6）志太平野の西奥部の北側丘陵に位置し、大井川の支流域がある東へ舌状にのびる尾根の先端に立地する。

墳丘は、小高い地形と盛土により築造された一辶20m程の方墳であり、埴輪や葺石はない。墳頂には、2基の木棺直葬（第1・2主体部）が並ぶ。主軸は尾根に並行する。

北側の第1主体部は、墳丘の中央に位置する。墓壙は約5m×2mの長方形であり、深さは地山面から約0.9mである。その中の約3.8m×1.2mの方形範囲において、細かい砾（砂利）が厚さ約0.1mに敷かれており、その上に組合式の箱形木棺を設置したと把握されている。砾床範囲の両端には、小口板の設置跡と推測される溝状の凹みが認められ、東小口では、その棺



外側に小石が並べられている。副葬品は鉄剣1、ヤリ先1、鉄鎌17、銅鏡3、不明鉄製茎部1であり、前期末葉頃に位置づけられている。

南側の第2主体部は、その北縁を第1主体部の上に重ねるようにして設けられている。長さ約3.3m、幅1.2~1.5mの長方形であり、深さは地山面から約0.4mである。底面の全体に対して、穢（砂利）が0.05~0.1mの厚さに敷かれている。床面は概ね平坦である。礫床の0.05m程上面において、中央部一帯に広がる朱が認められている。副葬品の出土はない。

藤枝市五鬼免1号墳（図6） 南へ舌状にのびる丘陵上に古墳群があり、の中でも、尾根の先端に1号墳が立地する。したがって、1号墳からは、東に面する

葉梨川流域から南方まで、広く平野を望むことができる。

墳丘は、地形と盛土による径20m程の円墳である。埴輪や葺石はないが、周溝から壺が出土している。墳頂には、2基の木棺直葬（東・西棺）が並ぶ。2基はわずかに切り合っており、西棺が先行する。ただし、いずれも墳丘の中央には位置していないことから、概ね同時期に並び設けられたものと理解することもできる。埋葬施設の主軸は尾根に並行する。

西棺は、約5.7m×1.1~1.7mの方形、深さは約0.3mである。構造ではなく、銅鏡3、刀子1、鉈1、ガラス小玉2が出土している。

東棺は、約6.7m×2.5mの長方形の墓壙に約6.4m

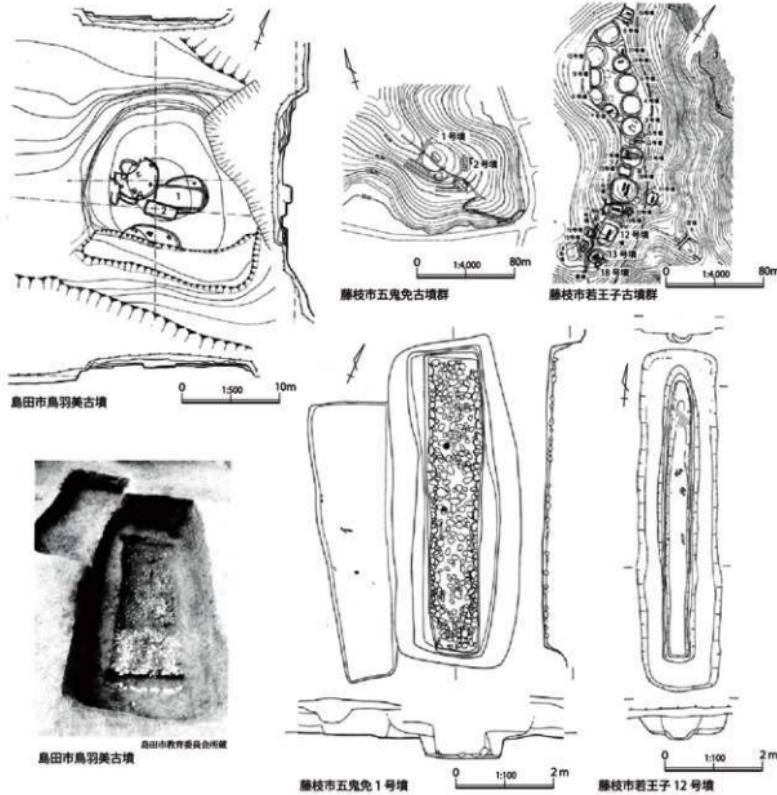


図6 志太地域の礫床をもつ木棺直葬

×1.8m、深さ0.5m程の木棺直葬が設けられている。そして、その底面全体に河原石を雜然と敷いた礫床を伴う。さらに、礫床の周縁には2段積みや大き目の石材による縁石構造がめぐり、その南小口が舟形のように尖頭状を成す特徴が指摘されている。ただし、平坦な礫床などからは、断面箱形の木棺が推測される。縁石の内側に木棺が設置されたとすれば、その規模は5.6m×0.8m程になる。副葬品は鏡1、櫛1、劍1、鉄劍3、鉗1、鉄斧1である。なお、記録写真をみると、鏡の直下に木質の残存を認めることができる。ただし、その方向は主軸に直交している。

時期は、出土遺物から前期後葉頃に位置づけることができる。

**藤枝市若王子12号墳**（図6） 潟戸川流域の西側丘陵に立地する円・方墳群のうち、12号墳は、最も高所に分布する前期～後期の27基の一群にあり、南にのびる尾根の南端部に位置する。したがって、最も眺望の良い場所に立地する古墳として評価できる。

墳丘は、地形の削り出しなどによる約18m×11mの方墳であり、葺石や埴輪はない。中央に約7.6m×1.7mの方形の墓壙があり、その中に約6.9m×0.7mの舟形の棺床が把握されている。さらに、一部の断ち割りによるものではあるが、木棺部分の下に礫床（砂利）を確認している。

副葬品には、分布の東限として注目される倒卵形の車輪石のほか、鐵劍1、鉄劍1、勾玉、管玉、ガラス小玉、さらに水晶製算盤玉がある。時期は前期末葉に位置づけられ、古墳群形成開始期に築造された古墳として評価できる。

**藤枝市若王子13・18号墳**（図6） 12号墳の南に位置し、尾根南端の一辺下がった場所に立地する。

13号墳と18号墳は切り合う関係にあり、いずれも直径10m前後の円墳である。礫床を伴う埋葬施設は、良好な状態で検出されていない。調査記録の写真をみると、18号墳の西寄りに礫（砂利）の広がりが部分的に検出されており、土層断面によって、断面U字形の木棺部の下にあたることが確認できる。

出土遺物が少ないために、時期の特定は難しい。古墳群における位置などを考慮するならば、12号墳に後続する時期の可能性が評価される。

**藤枝市東浦2号墳** 西にのびる丘陵先端部に分布する古墳群であるが、2号墳はその北東部に位置しており、尾根の先端という立地ではない。

一辺14m程の方墳であり、割竹形木棺の直葬2基、

箱形木棺の直葬2基のほか、礫床1基が検出されている。礫床は中心的な位置ではなく、規模は約1.9m×0.6mである。副葬品の出土はないが、他の埋葬施設を含めて中期前葉～中葉に位置づけられている（藤枝市1988）。

このほかに、藤枝市翁山遺跡における長方形の礫床をもつ円形周溝墓について、増井1978に記載があり、滑石製白玉の出土などから中期中葉に位置づけられている。

**八幡ヶ谷古墳との共通性** 八幡ヶ谷古墳の類例としてあげた志太地域の諸古墳について、とくに前期後葉～末葉頃の3基（鳥羽美古墳、五鬼免1号墳、若王子12号墳）は、中・小規模の円・方墳ではあるが、単独的な立地もしくは古墳群開始期の築造であり、優先的に丘陵尾根の先端部に築造されるという共通した特徴をもつ。さらに、鳥羽美古墳と若王子12号墳に砂利が用いられていることや、鳥羽美古墳と五鬼免1号墳では箱形木棺が推測され、同一墓壙ではないが、二棺が並ぶことも類似要素として考慮される。

以上から、志太地域と菊川地域に分布する「礫床をもつ木棺直葬」は、前期後葉～中期前葉において、近い系譜的関係や特質の中で構築された可能性を評価することができる。ただし、埋葬施設の規模や木棺形態、粘土の使用、礫床の範囲や造作などは各古墳で差異もある。緩やかな共通性の中において、各古墳の地域や時期、または階層的位置に関連した個性的な発揮があったものと理解したい。

### （3）礫構造の系譜について

この「礫床をもつ木棺直葬」に関する系譜的評価をさらに考察するにあたって、同時期（前期～中期前葉）の他の埋葬施設をみると、遠江中・東部から志太地域に礫構造の展開を確認することができる。

**磐田原台地の小規模墳**（図7） 磐田市竹之内原1号墳は、磐田原台地東縁部に立地する一辺9m強の方形墳であり、礫床と周囲に積まれた礫構造を伴う埋葬施設が検出されている（磐田市教1992）。同じ磐田原台地東縁部の新豊院山3号墓（一辺約12mの方形墳）では、礫床はないが、断面箱形の木棺部の周囲に礫を多用した埋葬施設をもつ（磐田市2006）。竹之内原1号墳からは土器と副葬品である鉄劍1、新豊院山3号墓も土器と副葬品である鉄劍1、鉗1、鉄劍2が出土しており、前期前半に位置づけられている。

磐田原台地の西縁部では、磐田市梵天遺跡H地点墳

丘墓（径10m程の円形墳）において、縄構造を伴う埋葬施設が発見されている。箱形の木棺が推測され、周囲の縄積みと疎らな縄床のほか、小縄が多く含む埋め土が認められている。土器と副葬品である玉類（勾玉1、管玉12、ガラス小玉40程）が出土している（磐田市2003）。磐田原台地北部の西縁に位置する磐田市大手内A15号墳は、一辺15m程の方墳であり、その第2埋葬施設において周囲に縄を用いた構造が認められる。第2埋葬施設からの出土遺物はないが、土器や第1埋葬施設の副葬品（鉄剣、鐵鏡、鉗、玉類）から前期後半の古墳とされる（豊岡村2000）。

このように、磐田原台地では、古墳時代の初頭頃から縄構造をもつ竪穴系埋葬施設を確認することができる。それぞれに構造の差異はあるが、いずれも木棺の周囲に縄を用いる構造であり、小規模な円形または方形の墳墓であることや、長軸2m程度の箱形木棺が推測される点も共通している。

なお、新豊院山遺跡C地点の土坑墓（SK2）において、周縁の縄使用が認められ、土坑墓上面から弥生土器片の出土が報告されている（磐田市2005）。また、新豊院山2号墳の前方部に縄構造をもつ埋葬施設が発見されており、磨製石斧の出土から弥生時代の可能性が指摘されている（磐田市2006）。不確実な状況ではあ

るが、出現が弥生時代に遡る可能性も考慮される。

前期の中・小規模墳における展開（図8）磐田原台地の周辺地域においても、前期の縄構造をもつ竪穴系埋葬施設を確認することができる。

掛川市吉岡原遺跡では、段丘縁辺に立地する無墳丘の小型土坑（墓壙）SF08において、周縁に縄をめぐらせ、その上に粘土を用いた構造が把握されている（掛川市1987）。

志太地域においても、縄床をもつ木棺直葬とは別に、棺側等に縄を用いる前期古墳を散見することができる。島田市旗指3号墳は、一辺14m程の方墳である。長さ約2.3mの棺部分の周囲について、小口部には大きめの縄、両側には小さな縄を用いた構造をもつ。副葬品はガラス玉3点である（柴田1978、島田市2003）。藤枝市秋合1号墳も一辺14m程の方墳であるが、縄は長さ約3mの木棺部の片側面にのみ用いている。二棺併葬の秋合6号墳（図4）も縄は一部の使用に限られる。副葬品は、1号墳では鉄剣1、鐵鏡4、鉗1であり、6号墳は不明鉄片のみである（藤枝市1980・2007）。藤枝市五鬼面2号墳では、方形に縄を配置した埋葬施設と縄詰めの排水溝が検出されている。縄床をもつ1号墳（図6）の斜面下方に立地する一辺9m以下の方墳であり、副葬品はない（八木1978、藤枝市2007）。

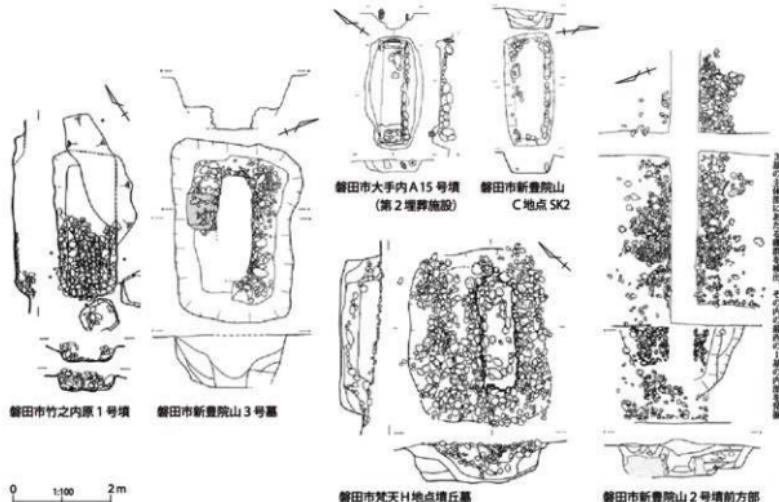


図7 前期の縄構造をもつ竪穴系埋葬施設1（磐田原台地の小規模墳）

以上の磐田原台地とその他の諸例は、棺部分の周囲に礫を用いる構造で共通し、多くは箱形木棺が推測される。また、これらは比較的小規模な円・方墳または無墳丘であり、一部に棺の長大化が認められるものの、立地、墳丘および副葬品の内容などは「礫床をもつ木棺直葬」に比べても劣る傾向にある。

しかし、牧之原市倉見原3号墳や袋井市春岡A1号墳では、その特徴は異なってくる。倉見原3号墳は、一辺15m以上の方墳であり、土器と副葬品である鉄剣

2、鉈1、ガラス小玉1が出土している。埋葬施設は、約5.5m×3.8mの墓壇内において、長さ約3.3m、幅

約0.8mの棺部分に礫積み構造がめぐる。これまで取りあげてきた礫構造をもつ諸例に比べて、長大な埋葬施設であり、明らかに用いられる礫の量が多い(山村・黒田1968)。さらに、袋井市春岡A1号墳では、計8tにもなる多量の礫によって、長さ3m程の箱形木棺に礫積みと礫床をもつ埋葬施設が構築されている。径約24mの円墳であり、副葬品には鉄剣1、ヤリ先1、鉈1、鉄斧1、鉄鎌10以上がある(袋井市1998、註10)。

このように、礫構造をもつ竖穴系埋葬施設は、少なくても前期前葉までには磐田原台地の小規模墳におい

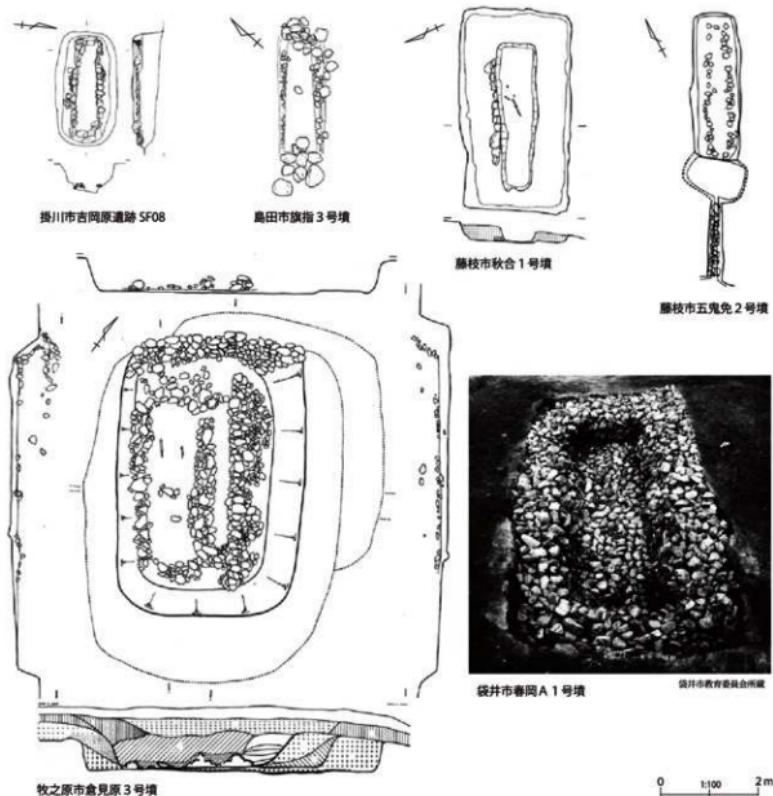


図8 前期の礫構造をもつ竖穴系埋葬施設2

て現れ、その後も遠江の中・東部から駿河西部にかけて、少數ながら小規模墳の箱形木棺を中心に展開したことがわかる。また、その展開の中で、一部の中規模墳に埋葬施設の長大化や疊の多量化を認めるこどもできる。なお、その一方で、前期後葉になると浜松市赤門上古墳（墳長約56mの前方後円墳）や島田市城山古墳（一辺16～20mの方墳）のように、割竹形木棺の小口に疊を用いた埋葬施設も現れている（浜北市2004、島田市1981）。

しかし、これらの埋葬施設に共通する点は、疊床ではなく、棺の周囲に疊を用いる構造にある。また、疊床があったとしても、棺周囲の疊と同等の疊を用いる場合が多く、八幡ヶ谷古墳などのような砂利敷きは確認できない。したがって、「疊床をもつ木棺直葬」との関係については、疊を用いた構造が展開する地域性としての評価は考慮されるが、これだけで系譜的なつながりを理解することは難しい。

**前方後円墳における様相（図9）** 磐田市新豊院山2号墳は、先述の同3号墓の東隣に立地する墳長約28mの前方後円墳であり、遠江における出現期（前期中葉）の前方後円墳である。三角縁神獣鏡1、小型鏡1、鉄刀1、短刀1、鉄劍5、銅劍28、鐵劍20、不明鉄器1

を副葬し、埋葬施設は竪穴式石室に分類されることが多い。しかし、その構造は割石積みや断面U字形の粘土床をもつものではない。構築墓壇の底面に粘土、疊、さらに粘土を平坦に敷き、その上に棺部分を残した周囲（壁体基底部）に粘土を貼る。壁体は、疊の敷き詰めと粘土の充填などの繰り返しにより構築される。さらに、壁面は疊により造られるが、その表面にも粘土が貼られる。断面形から箱形木棺の設置が推測できるが、天井石や粘土被覆は認められない（磐田市2006）。

この構造および形態の特徴については、長野県弘法山古墳などとともに既に注目されており、三木弘からは墓壇石壁の可能性（三木2007）、高松雅文からは類粘土層の理解（高松2009）が示され、いずれにおいても、弥生時代に遡る無蓋または木蓋の竪穴式石室の諸例を含めた評価が検討されている。

前期後葉になると、大型前方後円墳（墳長約107m）である磐田市松林山古墳が築造される。墳丘の規模・形態や埴輪、豊富な副葬品（三角縁神獣鏡1、内行花文鏡2、四獸鏡1、巴形銅器3、琴柱形石製品1、石劍2、貝製釧2、多くの玉類、農工具、武器類）によって、近畿中央の王權との強い関係がうかがえるほか、割石積みによる長さ7mを超える長大な竪穴式石室を



磐田市新豊院山2号墳

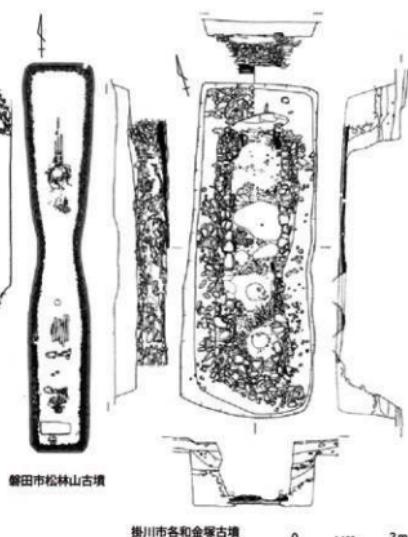


図9 前方後円墳における疊構造をもつ竪穴式埋葬施設

埋葬施設とする点についても、同様に評価される。天井構造には、天井石と粘土被覆が認められる。しかし、床面構造には粘土床を設けず、碌床である（後藤他1939）。三木弘は、竪穴式石室における東海・中部地方の地域的特徴の一つに碌床をあげており（三木1995）、松林山古墳もその特徴に当てはまる。

中期前葉では、墳長約66mの前方後円墳である掛川市各和金塚古墳において、碌構造が認められる。段築や葺石・埴輪を伴い、副葬品には多くの武器類や農工具のほか、刀子形などの石製模造品がある。埋葬施設は、長さ約4.8m、幅0.8m前後、高さ0.5m程の竪穴式石室であり、天井石を伴っている。しかし、壁面は割石積みではなく、床面に粘土床はない。壁体は、河原石である碌と粘土の充填による構造であり、壁面は碌積みによって構築されている。床面は、砂層によって水平面が設けられた上に、厚さ0.05m前後の碌敷き（砂利）が施された碌床であり、ベンガラの塗布も報告されている。また、この碌床面は平坦であり、箱形木棺の使用が推測されている（掛川市1981）。

これら3基の前方後円墳の埋葬施設は、同じ竪穴式石室に分類されるとしても、それぞれに個性的な構造を伴っており、一つの系列としては理解し難い。ただし、粘土貼り・割石積み・天井石などといった中・小規模墳にはない何等かの構造を伴っている点で、古墳時代の首長墳としての特別性を反映した埋葬施設であるという評価は可能である。さらに、壁体や天井の構造が個々に異なるのに対して、床面における碌敷き（砂利または碌）の構造は、3基すべてに備わっており、この点は、中・小規模墳における様相とは明確に異なる特徴として評価できる。そして、この碌床構造や箱形木棺を用いる場合が多いことについては、八幡ヶ谷古墳や志太地域の「碌床をもつ木棺直葬」にも共通する特徴として指摘することができる。

#### 4まとめ

八幡ヶ谷古墳の埋葬施設について、「碌床をもつ木棺直葬」として前期後葉以降の志太地域に類例を求めることができ、近い系譜的関係や特質にある可能性を評価した。さらに、磐田原台地では弥生時代もしくは前期初頭以降、その他の遠江中・東部や志太地域でも前期において、中・小規模墳に碌構造をもつ竪穴系埋葬施設の展開が認められるなか、前期中葉に出現する前方後円墳において、個々に異なる構造を採用しながらも、「碌床をもつ木棺直葬」と共通性のある碌床構造が

中期前葉まで認められることを確認した。

新豊院山2号墳の埋葬施設は、碌積みの壁面に粘土を貼ることから、木棺設置時の外観は粘土に囲われた墓穴になると復元できる。壁体の構造、構築技術に大きな差異はあるが、八幡ヶ谷古墳の場合も近い外観が推測される。また、八幡ヶ谷古墳の眼下に位置する上平川大塚1号墳は、新豊院山2号墳と近い規模の前期の前方後円墳であり、不時発見の経緯から詳細な構造を明確にすることはできないが、砂利による長さ約3.6mの碌敷き（碌床）と粘土を用いた埋葬施設であったことが記録からわかる（大谷2010）。先述のとおり、前方後円墳の埋葬施設は各々個性的な構造をもつことから、上平川大塚1号墳の埋葬施設の構造を詳細に特定することは躊躇される。しかし、碌床構造と粘土の使用は新豊院山2号墳と共に、また八幡ヶ谷古墳にも当てはまる特徴である。

この2基の前方後円墳は、三角縁神獸鏡を副葬する。これに対して、「碌床をもつ木棺直葬」の諸例は前方後円墳ではなく、相対的に盛土の少ない墳丘構造であるが、若王子12号墳の車輪石（岩木2003）や八幡ヶ谷古墳の巴形銅器など、近畿中央勢力の背景をうかがわせる希少な副葬品も少なくない。また、二段逆刺鐵の多量副葬が倭王權の影響力を示し、象徴する儀礼用具であったという指摘もある（鈴木2003）。

以上から、八幡ヶ谷古墳などの「碌床をもつ木棺直葬」は、遠江中・東部の前方後円墳における碌床と粘土を用いた構造から派生した、または前期中・後葉から中期前葉にかけて連動するように展開した可能性を評価したい。そこには、近畿中央の倭王權の影響下にありながら、割石積みや割竹形木棺から語られるものとは違った地域の一側面が示されていると考える。さらに、その背景として、古くから碌構造をもつ竪穴系埋葬施設が展開する地域、または、その周辺地域であることとの関連が考慮されるが、諸研究が示すような広い視野による歴史的評価を含めた理解も考えなければならない。

本稿を執筆するにあたり、滝沢誠氏、篠ヶ谷路人氏、岩木智絵氏、永井義博氏、白澤崇氏に御高配、御教示をいただきました。また、八幡ヶ谷古墳の調査時には、藏本俊明氏、鈴木一有氏、杉山和徳氏に御協力、御教示をいただきました。明記して感謝申し上げます。

## 註

- 1 古墳時代の時期については、岩原2012などと各調査報告書等を参考にした。なお、以下は「古墳時代」を省略して記載する。
- 2 埋葬施設に関する用語については、高松2011や岡林2012、中嶋2001を参考にしたが、室・櫛や直葬の区別が判断し難いこともあります。多くは調査報告書の判断にしたがって記載した。また、各古墳の埋葬施設の名称（○号主部室、○号棺など）についても、原則として各調査報告書にしたがった。
- 3 磨は、古墳などによって大小様々であるが、割石や板石に対して大局的に捉えるために、未加工の掌程度より小さい石を總称することとした。その中でも特に小さい磨については、砂利と併記する。また、磨を敷いた構造について、本稿で扱う古墳では木棺の下に敷かれたものと把握されていることから、棺内磨（岩本2003）とは異なる「裸床」とした。
- 4 木棺痕跡と思われる研磨の僅かな段差は、調査報告書（静岡県2009）の写真図版により確認できる。また、その位置は実測図面に記載されているものを確認した。
- 5 調査報告書の作成において、鈴木一有氏と杉山和徳氏にも御教示を受けているが、ヤリの特徴を観察することはできなかった。したがって、調査報告書（静岡県2009）でも鉄剣として報告し、その文中でヤリの可能性を指摘している。
- 6 この他に、浜松市神明社上1号墳（径約25mの円墳、中期中葉、浜北市2004）、菊川市長池4号墳（径約20mの円墳、中期中葉、菊川市2004）、藤枝市飯宿沢1号墳（径約13mの円墳、前期後葉頃、藤枝市2005）、藤枝市女池ヶ谷11号墳（一辺10m程の方墳、中期中葉、藤枝市1990）において同一墓壙の二棺併葬の可能性も考慮されるが、検出状況から判断する根拠に乏しい。
- 7 墳丘規模について、本稿では、中・小規模墳は概ね20m前後以下の円・方墳、小規模墳は概ね10m前後以下の円・方墳に対して用いる。なお、滝沢2003の「小型墳」は概ね本稿における中・小規模墳に該当する。
- 8 遠江・駿河（静岡県内）における竪穴系埋葬施設の諸様相については、松井1994、中嶋2001、滝沢2003などによって把握することができる。
- 9 島羽美古墳については、大塚1978と島田市1984のほか、調査資料の閲覧等について島田市教育委員会・篠ヶ谷路人氏に御高配いただいた。また、五鬼免1号墳と若王子古墳群については、八木1978と藤枝市1983・2007のほか、調査資料の閲覧等について藤枝市教育委員会・岩木智紘氏に御高配いただいた。
- 10 春岡A1号墳については、袋井市1998により概要が報告されているほか、調査資料の閲覧等について袋井市教育委員会・永井義博氏と白澤崇氏に御高配いただいた。

## 引用・参考文献

- 浅羽町教育委員会 1999 「五ヶ山B2号墳」
- 引佐町教育委員会 1983 「引佐町の古墳文化III」
- 岩木智紘 2003 「志太平野における車輪石出土の意義について—若王子12号墳出土車輪石からの一考察—」『静岡県考古学研究』35
- 岩原 剛 2012 「東海」『古墳時代研究の現状と課題』上 同成社
- 岩本 崇 2003 「棺内埋蔵数をもつ組合式箱形木棺」『大手前大学史学研究所紀要』第3号
- 磐田市教育委員会 1977 「磐田67号墳調査報告書」
- 磐田市教育委員会 1982 「新豊院山墳墓群」
- 磐田市教育委員会 1992 「竹之内1号墓跡発掘調査報告書」
- 磐田市教育委員会 2003 「県道浜松袋井線緊急地方道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 磐田市教育委員会 2005 「新豊院山遺跡発掘調査報告書 II C地点の発掘調査」
- 磐田市教育委員会 2006 「新豊院山古墳群 D地点の発掘調査」
- 磐田市史編さん委員会 1992 「磐田市史」資料編 考古・古代・中世
- 大塚淑夫 1978 「島田市鳥羽美古墳」『静岡県における4～5世紀の墳墓について』静岡県考古学会
- 大谷宏治 2010 「上平川大塚古墳の研究」『静岡県考古学研究』41・42
- 小笠町教育委員会 1991 「寺の谷3号墳発掘調査報告書」
- 岡林孝作 2011 「木棺の諸形態」『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社
- 岡林孝作 2012 「竪穴系埋葬施設（含棺）」『古墳時代研究の現状と課題』上 同成社
- 掛川市教育委員会 1981 「各和名塚古墳」
- 掛川市教育委員会 1987 「吉岡原遺跡発掘調査概報」
- 菊川市教育委員会 2004 「長池古墳群4号墳発掘調査報告書」
- 後藤守一他 1939 「静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告」
- 西郷藤八（著者・補記：大谷宏治） 2010 「『上平川大塚古墳明細書』」『静岡県考古学研究』41・42
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 「森町田丘陵の古墳群」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009 「菊川市下平川の遺跡群」
- 柴田 稔 1978 「島田市旗指3号墳」『静岡県における4～5世紀の墳墓について』静岡県考古学会
- 島田市教育委員会 1981 「城山古墳発掘調査（第三次調査）概報」
- 島田市史編さん委員会 1984 「島田風土記・大津編」

- 島田市史編さん委員会 2003 「島田風土記ふるさと大長・伊久身」
- 鈴木一有 2003 「二段逆刺鐵の象徴性」『静岡県考古学研究』35
- 高松雅文 2009 「埋葬施設の型式学的研究—粘土模の編年研究を中心に—」『2007年度共同研究成果報告書』大阪府文化財センター
- 高松雅文 2011 「木模と堅穴式石室」「古墳時代の考古学3 墓構造と葬送祭祀」同成社
- 滝沢 誠 2003 「志太平野における古墳時代前・中期の小型埴」『焼津市史研究』第4号
- 豊岡村教育委員会 2000 「大手内古墳群」
- 中嶋郁夫 2001 「主体部」「静岡県の前方後円墳—総括編」静岡県教育委員会
- 浜北市教育委員会 2000 「内野古墳群」
- 浜北市教育委員会 2004 「浜北市史」資料編 原始・古代・中世
- 袋井市教育委員会 1972 「袋井市雲座古墳D単位群発掘調査概報」
- 袋井市教育委員会 1990 「若作遺跡・若作古墳群」
- 袋井市教育委員会 1996 「高尾向山遺跡II」
- 袋井市教育委員会 1998 「見えてきた昔の春岡 はるおか遺跡群」
- 袋井市教育委員会 2004 「愛野向山II遺跡・愛野向山B古墳群発掘調査報告書」
- 藤枝市 2007 「藤枝市史」資料編1 考古
- 藤枝市教育委員会 1980 「日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書II—古墳時代編—新星野古墳群秋合支群」
- 藤枝市教育委員会 1983 「若王子古墳群」
- 藤枝市教育委員会 1988 「東浦遺跡発掘調査報告書」
- 藤枝市教育委員会 1990 「女池ヶ谷古墳群」
- 藤枝市教育委員会 2005 「仮宿渡古墳群・仮宿渡遺跡・仮宿堤ノ坪遺跡・仮宿堤ノ坪古墳」
- 増井義己 1978 「中部の現状と問題点」『静岡県における4~5世紀の墳墓について』静岡県考古学会
- 松井一明 1994 「遠江・駿河における初期群集墳の成立と展開について」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暉記念論集刊行会
- 三木 弘 1995 「堅穴式石室の基礎的検討—東海・中部地方の堅穴式石室の位置について—」『東京考古』13
- 三木 弘 2007 「墓壇石壁小考」『大阪文化財研究』第31号
- 焼津市教育委員会 1984 「焼津市埋蔵文化財発掘調査概報III—昭和57年度—」
- 八木勝行 1978 「藤枝市五鬼兔1・2号墳」「静岡県における4~5世紀の墳墓について」静岡県考古学会
- 山村宏・黒田勝久 1968 「榛原郡榛原町倉見原第3号墳調査報告」「東名高速道路(静岡県内工事)関係埋蔵文化財発掘調査報告書」静岡県教育委員会

#### 図の出典

- 図1 國土地理院発行 1:25,000地形図「下平川」を使用
- 図2 静岡県2009より編集、盾は浅羽町1999を使用
- 図3 静岡県2009より編集
- 図4 小深田西1号墳は焼津市1984、秋合6号墳・11号墳は藤枝市1980、磐田67号墳は磐田市1977、文殊堂8号墳は静岡県2008を使用
- 図5 筆者作成
- 図6 島羽美古墳は大塚1978、写真は島田市1984、五鬼兔1号墳は藤枝市2007、若王子12号墳は藤枝市1983・2007を使用
- 図7 竹ノ内原1号墳は磐田市教1992、梵天H地点墳丘墓は磐田市2003、新豊院山3号墓と新豊院山2号墳前方部は磐田市2006、新豊院山C地点SK2は磐田市2005、大手内A15号墳は豊岡村2000を使用
- 図8 吉岡原遺跡SF08は掛川市1987、旗指3号墳は柴田1978と島田市2003、秋合1号墳は藤枝市1980、五鬼兔2号墳は藤枝市2007、倉見原3号墳は山村・黒田1968、春岡A1号墳の写真は袋井市1998を使用
- 図9 新豊院山2号墳は磐田市1982・2006、松林山古墳は磐田市史1992、各和金塚古墳は掛川市1981を使用

# 遠江・駿河の鎌について

—藤枝市寺家前遺跡出土の柄付鎌の評価をめぐって—

大谷 宏治

**要旨** 弥生時代後期の可能性が指摘される藤枝市寺家前遺跡出土の木製柄付鎌は、東日本で弥生時代に位置づけられる鎌の類例が少ない中で、同時期の地域内の比較だけで弥生時代後期に位置づけるには課題があることから、まず遠江・駿河地域出土の鉄鎌と鎌柄の編年的位置づけを確認したうえで、寺家前遺跡出土例を各時期の資料と比較検討することで弥生時代後期に位置づけた。その後全国的な鎌柄の資料との比較を通じて、鎌柄のおおよその編年觀を示し、弥生時代後期に位置づけられることを再確認した。これにより、寺家前遺跡の木製柄付鎌が木柄と鉄鎌がセットとして残存する全国で最古の事例である可能性が高まった。

**キーワード** 柄付鎌（木製柄付鎌） 曲刃鎌 直刃鎌 鎌柄の分類 弥生時代～奈良時代 寺家前遺跡

## 1 はじめに

藤枝市寺家前遺跡（静岡県埋文センター2012・2013・2014a・b）の性格不明遺構SX610（あるいはB610）出土の木製柄付鎌は、弥生時代後期（弥生時代後期末～古墳時代前期初頭）に帰属する可能性が指摘されている（静岡県埋文センター2013、中川2011、註1）。古墳時代を勉強する筆者としては、古墳時代研究での鎌の変遷観から静岡県内での曲刃鎌の出現は古墳時代中期以降と考えており、即座に納得できる見解ではなかった（註2）。また、資料を集める中で、寺家前遺跡例が弥生時代後期の柄付鎌であるとすれば、現存する柄付鉄刃鎌として日本最古の例にあたる可能性もあることが判明したことから、鎌・鎌柄の類例を分析した上で慎重に位置づける必要性を感じた。

小論では、まず静岡県内の鎌について鉄刃と鎌柄に区分して時期的位置づけを確認する。さらに鎌柄については「木器集成図録」（奈文研1993）等に筆者が確認できた事例を加え、静岡県で想定される鎌柄の形態的変遷が全国的な動向と合致しているかの確認を行い、最終的に筆者の寺家前遺跡の鉄鎌の位置づけについて述べたい。

## 2 鎌の研究史

### （1）鉄鎌（鉄鎌刃）

既往の研究では弥生時代中期に鉄製鎌（曲刃鎌）が出現したと想定され、弥生時代を通じて曲刃鎌が主体となる（松井1985・1993・1994ほか）。この時期の曲刃鎌は個性が強く、形態差が大きい。その様相が変化するのは古墳時代前期で、日本列島に固有の短冊形直刃鎌が盛行する（松井1994、河野2014）。ただし古墳

時代前期に少ないながらも曲刃鎌が存在しており、直刃鎌と共に存する（寺澤1991、河野2011）。一方、古墳時代中期以降再び曲刃鎌が増加し、中期中葉以降直刃鎌が衰退し、曲刃鎌が盛行することが示してきた。

したがって、鉄鎌については、まず形態的に個性の強い曲刃鎌が弥生時代中期に出現し、弥生後期に増加する。弥生時代末～古墳時代初頭ごろに、日本固有の短冊形直刃鎌が出現するにあたり、曲刃鎌が一時的衰退し、古墳時代中期以降再び曲刃鎌が主体的に用いられ、茎をもつ曲刃鎌が出現するまで盛行することが明らかとなっている。

また、鎌は形状よりも大きさに用途（機能）が反映し、刃部の形状ではなく、大きさを基準に分類するほうが有効的であると考えられている（松井1993、寺澤1991）。なかでも寺澤薫氏は、現在の鎌刃の種類と比較することで直刃、曲刃という形態差よりも刃弦長（刃長）に機能差が現れていることを指摘し、刃弦長により鎌刃を3種（大・中・小）に分類している。小型は、全長10～12cm以下、刃幅2cm以下、刃渡り8～10cm以下、中型は全長12～18cm前後、刃幅は2～3cm、刃渡り10～16cm、大型は全長20cm程度以上、刃渡り17cm以上、刃幅3cm以上とした。各種類の用途は小型は「穂切り鎌」、中型は「刈鎌」（主に稲の根刈鎌）、大型は「除伐用大鎌」に位置づける（寺澤1991）。その上で寺澤氏は、弥生時代中期後半に北部九州でまず大型鎌が出現し、つづく弥生後期に北部九州で中型鎌が出現するものの、稲穂は手鎌で摘み取られる傾向にあること、根刈鎌の普及は九州とその周辺地域にとどまっており、近畿地方以東にはほとんど普及しないことを明らかにした。また、手鎌による穂首刈が優勢で

ある傾向は古墳時代中期頃まで継続していたことを明らかにした（寺澤1991）。

## （2）鎌柄

上原真人氏は『木器集成図録近畿原始篇』の解説において、鎌「柄はまっすぐなものが多く、（中略）屈曲気味になるのは6世紀後半以降」、弥生時代の鎌柄は柄頭の「突起が顕著で、時期が降ると退化する。8世紀以降の鎌柄では、突起は痕跡を残すにすぎない」、「弥生～古墳時代の装着孔は柄と直交し、奈良～平安時代の装着孔は柄と鈍角をなす例が多い」とを指摘している（上原1993）。また、鎌柄には全長30～50cm弱と60cm以上の柄が存在すること、前者を通常の「鎌柄」、後者を田園に残った稻藁を刈り取る「大鎌（葦鎌）」柄であった可能性が高いことを指摘している（上原1993）。

中川律子氏は、藤枝市寺家前遺跡出土の柄付鎌の位置づけを探る中で、静岡県内出土の弥生時代の鎌柄の類例を挙げ、浜松市角江遺跡や静岡市有東遺跡等と類似することを指摘し、寺家前遺跡の柄付鎌を弥生時代後期（報告書では、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭）に位置づけた（中川2011、静岡県埋文センター2013・2014b）。

鎌柄は、全体的な形態によるおよその時期的変遷が示されるが、類例数が少ないため、必ずしも時期的変遷が明確になっているわけではない。また、鉄鎌の装着角度により、下草刈りの「除伐鎌」（寺澤1991）、刈鎌などに区分できる可能性があるが、実際に鎌柄に装着された状態で出土した鎌は、装着孔の角度に規制されることなく、鉄鎌が挿入されているものもあり、鎌の折り曲げや装着孔の角度から鎌の機能を特定することは難しいことが指摘されている（寺澤1991）。

## 3 遠江・駿河出土の鉄刃鎌について

### （1）鎌刃、鎌柄の名称と分類

まず、分析を始める前に、本書で使用する柄付鎌の部位名称などについて定義したい（図1）。

**鎌刃の分類** 鎌刃は、茎を有するもの（有茎式）と、茎がないものに分類する（無茎式）に区分する。

小論は鎌の機能解明を目指すものではないため、機能差を示すとされる寺澤薰氏の分類に準じて大きさにより大・中・小型に区分する（寺澤1991）。また、刃が湾曲する曲刃鎌と、直線的な（短冊形の）直刃鎌に分類する。

なお、以下で鎌とした場合は、鉄鎌刃のことを指し、

木製あるいは石製鎌刃の場合は、木鎌（木刀）・石鎌と表記する。

**鎌柄の部位名称** 鎌柄は鉄鎌刃などを装着する木柄である。柄の上部を柄頭、手に持った際に外れにくくするグリップ部分を柄尻とし、その中间部分は柄身とする。鎌刃を装着する部分を装着部とする。

**寺家前遺跡出土柄付鎌の特徴** 寺家前遺跡出土の柄付鎌について、その特徴を記しておきたい（註3）。

鎌刃は甲類（刃を下に向かたときに右側を手前に折り曲げる）であり、刃幅全体をL字形に折り曲げる。刃は曲刃であるが、棹（背）側は直線的で先端部が嘴状に曲がるもので、刃部は使用されたことによりやや内湾度合いが大きくなっている可能性がある。大きさは、残存長13.7（想定復元長14.0cm、復原刃渡りは11cm）、刃幅（基部付近）3.1cmである。この大きさは、上述した寺澤薰氏分類の中型に該当する。

鎌柄は、グミ属を加工して製作されたものである。装着部を柄身よりも幅広に作り、柄身と装着部には明瞭な段差が設けられている。柄頭は装着部よりもさらに幅広に作られる。後述する鎌柄Ac類に該当する。柄尻は欠損しており不明であるが、他の多くの事例と同様柄身よりも大きく作っていた可能性が高い。残存長30.3cm、柄身は直径1.7cm、装着部幅1.7cm、柄頭幅4.5cmである。装着部から柄頭の長さは9.5cmである。元来の全長は40cm前後に復原されよう。上述した上原真人氏分類の通常の鎌柄に位置づけることができる可能性が高い（上原1993）。

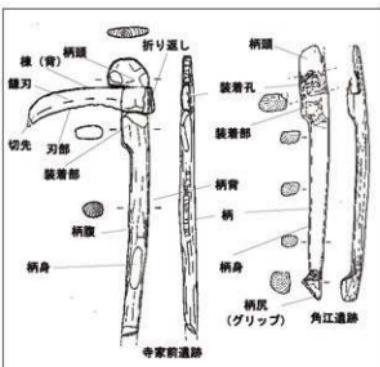


図1 柄付鎌の部位名称

## (2) 遠江・駿河の鉄刃鎌について

弥生時代の遺跡から出土した鉄製品については近年竹内直文氏（竹内2000）、杉山和徳氏（杉山2011・12）により集成が行われており、鎌刃で明確に弥生時代に位置づけられるものはほとんどなく、森町峯山台状墓と静岡市川合遺跡例のみである。ただし、前者は時期が新しい可能性がある。後者は形態の特徴から手鎌で、小論で検討する柄付鎌ではない可能性がある。したがって、両者とも弥生時代の鎌として位置づけるには課題がある。

遠江・駿河地域内では、古墳時代以降、鎌の出土が増加し、古墳前期～中期までは副葬品として出土することが多いが、後期以降副葬品数は減少する。奈良時代以降は集落から出土することが多くなり、数量は増加する。これらの鉄鎌について時期毎に弥生時代から奈良時代までみておきたい（図2）。

**弥生時代の鎌** 弥生時代に位置づけられる鎌は、静岡県内でいくつか確認されている。

まずは、静岡市有東遺跡で、木製曲刃鎌が挙げられる（註4）。弥生時代中期後葉（以下、弥生時代、古墳時代の時代区分を示す場合には、時期をとって記載する）に位置づけられる。弥生中期に位置づけられる鉄鎌は確認されていない。

弥生後期後半では、静岡市川合遺跡、森町峯山台状墓出土例が挙げられ（杉山2011）、後期末～古墳前期前半では、袋井市愛野向山II遺跡（註5）、磐田市梵天遺跡出土例がある。川合遺跡出土例は腐食が進行し詳細が不明確であり、切先とされる圓の左側部分が手前に湾曲しはじめていることから手鎌の可能性も排除できない。鎌とすれば直刃鎌である。峯山台状墓例は形状が不明確である上、出土地点近くからは古墳中期～後期の土器が出土しており、必ずしもこの時期に位置づけられるかどうか不明確である。切先が失われていることから曲刃鎌か直刃鎌か不明確であるが、後者の可能性が高い。

一方、愛野向山II遺跡、梵天遺跡とともに直刃鎌であり、つづく古墳前期後半以降の直刃鎌と同様の形状を呈するものである。

**古墳時代の鎌** 古墳前期中葉～後葉では、浜松市赤門上古墳などで出土しており、いずれも直刃鎌である。

古墳中期前半では、掛川市浅間神社古墳、菊川市八幡ヶ谷古墳で曲刃鎌が出土し、中期中葉の磐田市堂山古墳、袋井市五ヶ山B2号墳、菊川市長池4号墳で曲刃鎌が直刃鎌と共に伴している。

中期前半～中葉の古墳では直刃鎌と曲刃鎌が併存しているが、中期後葉以降の古墳には直刃鎌は副葬されていないため、中期後葉以降は再び曲刃鎌に一本化された可能性が高い。中期前半～中葉の曲刃鎌は、背部分は直線的で、先端が嘴状に屈曲するものである。

つづく古墳後期以降、鎌の副葬は減少し、出土量が減少するが、浜松市半田山古墳群や富士市中原4号墳などで出土している。刃部側、棟側とともに弧を描くものとなり、中期よりも全体的な湾曲が大きいものが多くなる印象を受ける。

**奈良時代の鎌** 基本的に古墳時代後期と大きな変化は確認できない。曲刃で、鎌柄に装着する部分を一部折り返すものである。

図2には図示していないが、平安時代から鎌倉時代にかけて有茎式の鎌が出現し、盛行していくと想定できる。

## (3) 寺家前遺跡の鉄鎌の位置づけ

**寺家前遺跡の鉄鎌** 寺家前遺跡の鎌は、刃部は使用によりすり減ったかのように湾曲が大きくなっている可能性が高く、棟はほぼ一直線であり、先端部分が嘴状に緩やかに曲がるものである。

遠江・駿河の鉄鎌の形態的な変遷を考慮すれば、曲刃鎌である寺家前遺跡例は、古墳中期以降に位置づけられる形態である。ただし、弥生後期以前の鉄鎌が確認でないため、その時期の鉄鎌である可能性を排除できない。一方で、棟部まで弧を描くようになることが多い（寺澤薫氏によるE/F類、寺澤1991）古墳後期以降のものとは若干形態が異なるようであり、遠江・駿河では未知の弥生時代後期～末に位置づけられるか、古墳中期以降に位置づけられる可能性が高い。

**弥生時代～古墳時代前期の曲刃鎌** 遠江・駿河の事例のみでは寺家前遺跡例の位置づけは難しいことから、寺家前遺跡例が古墳前期以前に位置づけることが可能かどうか確認したい。

日本列島で採用された初期の鉄鎌は、弥生中期～後期で曲刃鎌である。弥生後期末から前期初頭に日本列島独自の形態である短冊形直刃鎌が主体的に用いられるようになるが、曲刃鎌も存在している（河野2011、寺澤1991）。弥生時代の曲刃鎌は形態的なバラエティに富んでおり（図3）、規格的に生産されていた可能性は低い（寺澤1991）。河野正訓氏が取り上げた弥生中・後期～古墳前期の曲刃鎌の形態（図3、河野2011）と比較すると切先の形状などは異なるが弥生時代の福岡

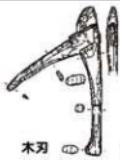
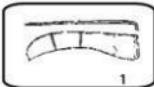
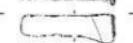
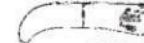
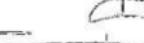
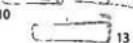
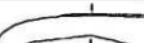
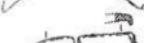
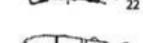
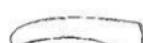
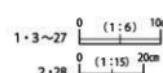
曲刃鎌		直刃鎌	
弥生中期	1 藤枝寺家前遺跡 2 静岡有東遺跡 3 森峯山台状墓 4 筑田梵天遺跡 5 静岡川上遺跡 6 袋井愛野向山Ⅱ遺跡 7 浜松赤門上古墳 8 浜松椎原平山7号墳 9 静岡三池平古墳 10 挿川日進御所社3号墳 11 菊川八幡ヶ谷古墳第1主体部	 <p>木刀 ◎ 2</p>	
弥生後期	曲刃鎌採用?	 <p>1</p>	 <p>3 古墳中期以降の可能性あり</p>
古墳前期			 <p>4</p> <p>直刃鎌主体</p>  <p>6</p>  <p>7</p>  <p>8</p> <p>手鎌の可能性あり</p>  <p>■ ■ ■</p>
古墳中期	曲刃鎌主体	 <p>14</p>  <p>15</p>  <p>16</p>  <p>18</p>	 <p>11</p>  <p>10</p>  <p>12</p> <p>表道</p>  <p>■ ■ ■</p>
古墳後期～終末期	曲刃鎌主体	 <p>19</p>  <p>20</p>  <p>21</p>  <p>22</p>  <p>23</p>	12-14 菊川八幡ヶ谷古墳 第2主体部 13 蓼田堂山古墳 15 袋井五ヶ山12号墳 16 菊川長池4号墳 17 藤枝若王子7号墳 18 藤枝若王子19号墳 19 揖川塙／内13号墳 20 浜松半田山C26号墳 21 浜松半田山D21号墳 22 田島白岩寺2号墳 23 藤枝越ヶ谷B7号墳
奈良以降		 <p>24</p>  <p>25</p>  <p>26</p>  <p>27</p>  <p>28</p>	24-25 浜松伊場遺跡 26-27 富士東平遺跡 28 静岡瀬名遺跡
		 <p>1・3～27 (1:6) 10cm            2・28 (1:15) 20cm</p>	

図2 遠江・駿河における鎌の変遷

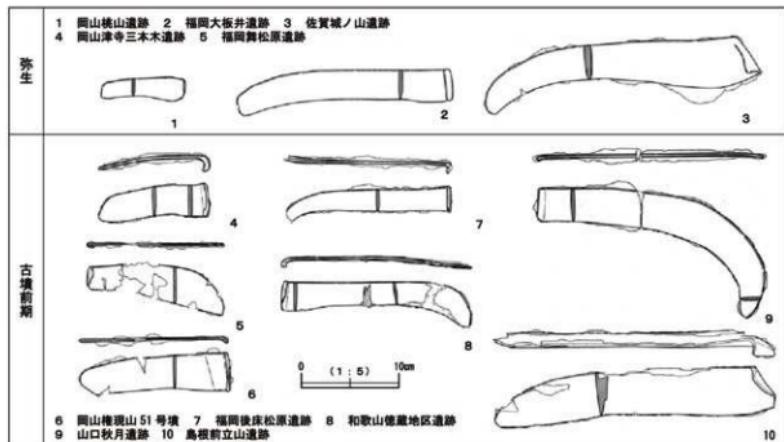


図3 弥生時代～古墳時代前期の曲刃鎌（河野2011より）

県大板井遺跡例や岡山県桃山遺跡例に類似し、古墳前期では、福岡県後床松原遺跡や和歌山県德蔵地区遺跡出土例に類似するように見えることから、断言することは難しいものの寺家前遺跡例は、遠江・駿河では曲刃鎌の類例が知られない弥生後期～古墳前期に位置づけられる可能性を十分に想定できる。

#### 4 鎌柄の分類

上述したように鎌刃のみでは時期を特定することが難しいため、ここでは鎌柄の分析を行ないたい。

まず、分析に先立って、鎌柄の形態的な分類を定義したい（図4）。

**鎌柄の分類** 鎌柄は単純な形態であるが、遠江・駿河の鎌柄の集成立行う中で鎌柄を分類することが可能であると判断し、下記の通り分類する。

まず、鎌刃と柄を同一の木材で作成する「一体作り」と、鎌刃と別作りの鎌柄を組み合わせる「組合せ式」に区分する。さらに後者を、柄の形態・鎌刃の装着方法から大きく4種類に区分する。なお、A～C類は大きく「（鎌刃）挿入式（I式）」、D類は「（鎌刃）落とし込み（差し込み）式、II式」と大きく区分することができる。

**A類 納孔**（以下、装着孔）を挟って鎌刃を装着するもので装着部・柄頭を柄身よりも幅広あるいは厚手に作るもの。

**Aa類** 装着部と柄頭に明瞭な区画がないもの、

柄身と装着部の境界が撫閏のもの。静岡市有東遺跡例・浜松市梶子遺跡例など。

**Ab類** 装着部と柄頭に明瞭な区画がないもので、柄身と装着部の境界が直角に近いもの。浜松市角江遺跡例など。

**Ac類** 装着部よりも柄頭が大きいもので、柄腹側の幅を広げるもの。藤枝市寺家前遺跡出土例など。

**Ad類** 装着部全体を柄身より大きく作り、柄背側の幅を広げるもの。柄身が背側に屈曲するものが多い。滋賀県湖西線関係遺跡例など。

**B類** 柄身に装着孔を挟って鎌刃を装着するもので柄頭のみを柄身よりも大きく作るもの。浜松市恒武山ノ花遺跡例など。

**C類** 柄身に装着孔を挟って鎌刃を装着するもので全体が棒状で、柄頭と柄身の明瞭な区分のないもの（装着部と柄身の厚さもほぼ同一）。

**C1類** 柄頭が柄身と比較してやや幅広につくられるもの。静岡市神明原元宮川遺跡例など。

**C2類** 柄頭と柄身がほぼ同幅のもの。

**D類** 柄身が直線的で、柄頭に鎌刃の茎を嵌めむための切り込みを入れるもの（納穴を穿つもの）。ただし、弥生時代や古墳時代のものについては、頭部が欠損している、あるいは未製品で頭部がさけている可能性もあることを念頭に

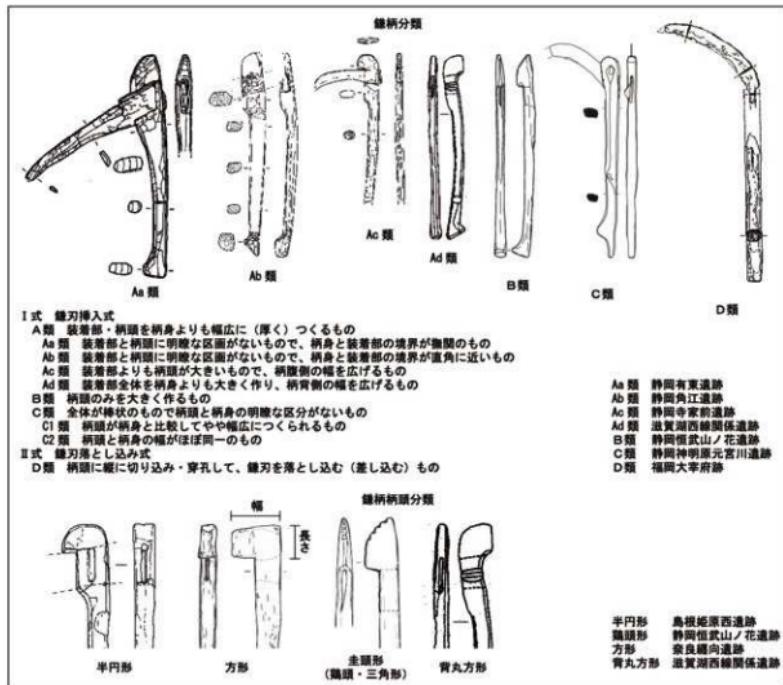


図4 鍔柄形状と鍔柄頭の分類

置く必要がある。浜松市角江遺跡などの事例から弥生時代後期には存在している可能性がある。

**Da類** 茎のない鉄刃を落とし込み、紐等で固定するもの。

**Db類** 茎のある鉄刃を差し込むもので、口金（貴金具）等で固定するもの。

**柄頭の分類** 柄頭を柄身より大きく作る Ab・Ac・Ad類と B類の柄頭の形状を下記のとおり4種類に分類する。

半円形 寺家前遺跡例・島根県姫原西遺跡例

方形 奈良県纏向遺跡例

主頭（鶴頭・三角）形 恒武山ノ花遺跡例ほか

背丸方形 滋賀県湖西線関係遺跡

なお、方形と主頭形の境界を明確に区分することは難しく、おむね長さが幅より短いか同じ程度のものを方形、長さが長いものを主頭形とする。

**鍔の装着角度の分類** 角度は鍔刃の刃部と柄身の装着角度であり、鍔刃の装着角度について下記のとおりとする。実際に鍔刃が残存しているものが少ないので、装着孔の削り抜き角度で推測するものが多い（註6）。

**锐角** 85度未満のもの。

**直角** 85～95度前後のもの。

**钝角** 95度以上のもの。

## 5 鍔柄の編年的位置

### (1) 遠江・駿河における鍔柄の変遷

ここでは寺家前遺跡例を除いて、各時期の鍔柄についてみておきたい（図5）。

**弥生時代の鍔柄** 静岡市有東遺跡と浜松市梶子遺跡で中期後葉に位置づけられるAa類が出土している。鍔柄の形態は、装着部と柄身は明瞭な段差ではなく、斜角（撫角）である。

弥生後期に位置づけられるのは、浜松市岡の平遺跡のAa類、浜松市角江遺跡出土の鎌柄Ab類である。前者は柄身と装着部の幅が不明瞭であるが装着部を柄身よりも厚く作ることから、Aa類に区分する。後者は柄身と装着部に明瞭な段差があるもので、柄頭と装着部は同幅である（註7）。また、角江遺跡では鎌刃と柄を一体作りにした木刃鎌が出土している。

弥生時代の（組合せ式）3例の鎌柄は装着部を柄身より大きく作ることが特徴である。また、装着孔は鎌柄を锐角あるいは直角に装着するのに适したあけ方が施されている。

**古墳時代の鎌柄** 古墳前期に位置づけられる事例がなく、弥生時代からの変遷過程が不明確であるが、古墳中期中葉以降に位置づけられる事例が確認できる。中でも浜松市恒武遺跡群（山ノ花遺跡・西浦遺跡）で古墳中期に位置づけられる鎌柄が多数出土している。これらは基本的にB類で柄頭の形状は圭頭形（直角三角形に近い形状を含む）で、鎌柄はB類に限定される。鎌は柄に対して直角に装着するのに适した（柄身に直交）状態であげられており、鎌は直交して装着されていた可能性が高い。

古墳後期～終末期でも、静岡市神明原・元宮川遺跡例などをみると、基本的にB類であった可能性が高い。ただし、中期のものと比較すると柄頭幅が狭くなっている。この点を重視すれば、古墳後期には柄頭と柄身が同幅のC類が出現していた可能性が高い。柄頭幅が狭くなるのは、鎌刃の柄頭へのかかりを小さくし、可動域を大きくするための工夫であった可能性が高い。

**奈良時代以降の鎌柄** 奈良時代以降に位置づけられる鎌柄は、基本的にB類あるいはC類である。B類は古墳後期～終末期のものと比較してさらに柄頭幅が狭くなっている。装着孔は直角・鈍角に鎌刃を装着するのに適した方向にあげられている。それとともに柄頭がさらに小さくなったことから、刃の装着角度を自在に変更することができるに適した形状といえ、古墳時代後期以降連続的に採用されていることがわかる。

一方、浜松市伊場遺跡では、8世紀に位置づけられているAb類が出土している。この例から装着部を柄身よりも大きく作るもののが存在している可能性がある（註8）が、これまでのところ遠江・駿河ではA類は基本的に弥生時代のもので、古墳時代には現状で確認できない形状であるため、この形状が弥生時代から奈良時代へと連続して採用されていた可能性は低い。

**遠江・駿河の鎌柄の変遷** 遠江・駿河の鎌柄の変遷

からは、鎌刃装着部を補強するため柄身よりも装着部を幅広く形成する（弥生中期）。第二段階として、鎌刃が柄頭側へずれるのを防ぐため柄頭を大きく作る（弥生後期）。第3段階として、鎌刃のずれが柄頭を大きく作ることで防げるようになったため、装着部を幅広く作る必要がなくなり、柄身と装着部を同じ幅にし、柄頭のみを大きく作るようになる（古墳前期以降）。第4段階として、鎌刃を鈍角に装着するため柄頭の大きさが減少し（古墳中期以降）、第5段階として、柄頭から柄身まで同幅となる（古墳中期以降か）。小論では取上げなかったが、これまでの研究を踏まえれば、第6段階として、鉄刃に茎を有するものが出現し、柄頭の上部から刺し込み、責め金具（口金）で固定するようになるという変遷過程が想定できる。

## （2）弥生時代～古墳時代の鎌柄の変遷

本章（1）で検討した遠江・駿河の鎌柄の特徴が他地域の鎌柄と軌を一にしているかどうかについて全国的な鎌柄の変遷を確認しておきたい。木製品の出土は多いものの、鎌柄の出土は意外と少なく、同一地域内での変遷を追うことは難しいため、静岡県埋蔵文化財調査研究所ほかが主催した「農具の変遷」シンポジウム資料集（静岡埋文研ほか1994）や「木器集成図録」（奈文研1993）、「島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成」（島根県古代文化センター・島根県埋文センター2006）、「大和木器資料Ⅰ」（権原考古学研究所2000）などに掲載された鎌柄を形態的な特徴を踏まえて時期ごとに並べた（図6）。

**弥生時代** 弥生時代例では筆者が調べられた限りで全体的な形状が分かるものは、神奈川県池子遺跡（1-A地点）の弥生中期後葉の宮ノ台期に位置づけられる組合式木刃鎌と福岡県比恵遺跡群の弥生中期初頭後の石鎌か斧柄とされる木柄のみである。前者は挿入式ではなく、基部を太く作り、その太く作った部分に柄身に平行して穿孔して鎌刃に柄を挿入するもの（註9）、鎌刃挿入式のものは特徴が大きく異なっており、直接的な連続性はうかがえない。後者は、Aa類であり、静岡県梶子遺跡例に類似する。これが鎌柄であるとすれば、現状で最古の鎌柄の可能性が高い。

後期には装着部を柄身より大きく作るA類（Aa・Ab・Ac類）と柄頭のみを大きく作るB類の2者が確認できる。また、D類も存在していることが指摘されている（上原1993）。A類は佐賀県吉野ヶ里遺跡（佐賀県教委2003）でAa類、Ac類、福岡県惣利遺跡でAa

	鍔柄Aa類	鍔柄Ab類	鍔柄Ac類	鍔柄B類	鍔柄C類
弥生中期					
弥生後期					
古墳前期					
古墳中期					
古墳後期					
終末期					
奈良以降					

図5 遠江・駿河における鍔柄の編年的位置

	鎌柄Aa類	鎌柄Ab類	鎌柄Ac類	鎌柄Ad類	鎌柄B類	鎌柄C類
発生中期	1 2					
発生後期	1 3	4 5			9 10 11 12 13 14 15	28 27
古墳前期	断続?		断続?			
	0 (1 - 12) 40cm					
古墳中期	1・2 福岡比恵道跡群 3・4 佐賀吉野ヶ里道跡 5・27 鳥取郡西道跡 6 大阪小阪道跡 7 淀賀湖西線関係道跡 8・22 京都石本道跡 9 千葉国府間道跡 10 大阪西岩田道跡 11 鳥籠田中谷道跡 12 佐賀吉野ヶ里道跡 13 石川二口八べ道跡 14 千葉国府間道跡 15 斎良郷向道跡				16 17 18	
古墳後期	16・24 愛媛福寺道跡 17 備知勝川道跡 18 京都古殿道跡 19 千葉菅生道跡 20 山形西沼田道跡 21 千葉床代道跡 22 大阪長原道跡 25 福岡板付道跡 26 紫良平城京跡 28 神奈川池子道跡	6 Ac類? 柄身の屈曲 が特徴まる	7 Ad類	8 Ad類	19 20 21 22 23	24 25 26
飛鳥 奈良	※1・2については、石鎌柄あるいは 鉄の可能性あり。				東村山市下宅部道跡 (Ad類、10世紀頃か)	

図6 遠江・駿河を除く日本列島における鎌柄の編年的位置

類（夜須町教委1997、註10）、島根県姫原西遺跡でAc類が、B類は、大阪府西岩田遺跡（木製鎌刃）、島根県田中谷遺跡（註11）などで出土している。B類は方形柄頭（西岩田遺跡例）あるいは半円形に近い方形（国府閨遺跡例）であり、柄頭幅が柄頭の長さよりも大きいのが特徴である。B類は弥生時代後期には出土しているが、後期後半から主に採用され始める可能性が高い。また、B類のうち、佐賀県川吉原遺跡では柄頭が小さなものが出土している。これは柄頭によって鎌の装着角度に制限がないことから、鎌の装着角度を自在に変えることができる鎌柄が出現していた可能性がある。松井和幸氏は、鎌刃の鎌柄への装着角度の分析により、弥生時代中期から後期のもので純角になるのは大型の鎌であるとする（松井1993）ことから、川吉原遺跡例は大型の鎌刃を純角に取り付け、草刈り用等として利用する「除伐用」鎌柄であった可能性が高い（註12）。つまり、通常の鎌柄はA・B類主体で、「除伐用鎌柄」では、柄頭が小さなB類や柄頭が柄身と同幅のC類が存在した可能性が高い。

古墳時代 棚向遺跡では、第149次調査の太田池地区での調査で土坑（井戸）底から著名な木製仮面とともに鎌柄B類が出土し、同一層位から出土した土器により庄内期古相に位置づけられている（福辻2013）。また、石川県二口八丁遺跡、千葉県国府閨遺跡などでも弥生後周末～古墳前期初頭に位置づけられる鎌柄B類が出土している。この段階で近畿から東日本にも鎌柄B類が出土していることが明らかである。一方で、弥生時代に九州・中国や遠江・駿河で確認されたAa・Ab・Aa類は確認できず、装着部を柄腹側に幅を広げる形状のものは衰退していた可能性が高い。

古墳中期では、B類・C類が出土している。B類は柄の長さが50cm未満の通常の鎌柄で、C類は大鎌柄である。B類は弥生後期から古墳時代前期には方形柄頭であったものが、継長の尖頭柄頭に変化していることが読み取れる。また、古墳中期後半から後期前半に位置づけられる大阪府小阪遺跡のAc類があるが、装着部全体を幅広につくるというよりも柄身の一部に段をつけたような状況であり、弥生時代のものが継続的に用いられていたという証拠にはならない。

古墳後期～終末期も基本的にB類が主体で、C類も継続して用いられた可能性が高い。この段階で柄頭が背丸方形で装着部を背側に大きく作る、柄身が屈曲する（外湾気味の）Ad類が出現している（上原1993）。

奈良時代以降 奈良時代以降は平城京でC類が出土

しており、遠江・駿河の事例から判断すれば、B・C類が用いられていたことは明らかであるが、C類の方が主体的に用いられた可能性が高い。柄頭は背丸方形か主頭形である。一方、東京都東村山市下宅部遺跡（註13）のように少ないながらものAd類が継続して用いられる。このことからは奈良時代以降はC類を主体に、Ad類・B類が用いられた可能性が高い。

### （3）寺家前遺跡の鎌柄の編年的位置づけ

以上分析したように、遠江・駿河及び全国的な鎌柄の編年位置から考えると、寺家前遺跡のように装着部を柄身よりも（柄腹側に）幅広に作る事例は、概ね弥生時代中期～後期に位置づけることができる。さらには、寺家前遺跡例は、島根県姫原西遺跡例と酷似していることから、同時期に位置づけてよいと考える。姫原西遺跡例は弥生時代後期に位置づけられることから、寺家前遺跡例も弥生時代後期に位置づけたい。

## 6まとめ～寺家前遺跡の柄付鎌の位置づけ～

### （1）寺家前遺跡柄付鎌の編年位置と特質

小論を閉めるにあたり、これまでの内容を要約しまとめとしたい。

寺家前遺跡例は曲刃鎌であること、鎌柄の類例の絶対数が少ないと今後も継続的に検討することが必要であるが、遠江・駿河の鎌柄の変遷及び全国的な弥生時代～古墳時代を中心とした時期ごとの鎌柄の形態的特徴の分析から、鎌柄は弥生中期～後期に装着部を柄身よりも幅広に作る傾向が確認できること、古墳時代前期以降の鎌柄は基本的に柄頭のみを大きく作るB類が大部分であること、最も形態が類似する島根県姫原西遺跡出土例が弥生後期に位置づけられていることから、古墳前期初頭まで降る可能性はあるものの、中川律子氏の位置付けを追認し（中川2011）、寺家前遺跡例を弥生後期に位置づけたい。

この判断が正しければ、筆者が確認できた中では、柄付鉄刀鎌の現存例としては、日本列島最古の事例の可能性が高く、非常に貴重な事例となる。

また、駿河では弥生時代の鉄製品の本格的な普及が弥生後期以降である（大谷2015）が、鎌柄の形態からみると島根県姫原西遺跡例が最も近いことから、鉄器の流入にあたって、太平洋岸だけではなく、日本海側から中部高地などを経由した流通経路も考慮しておく必要があるだろう。

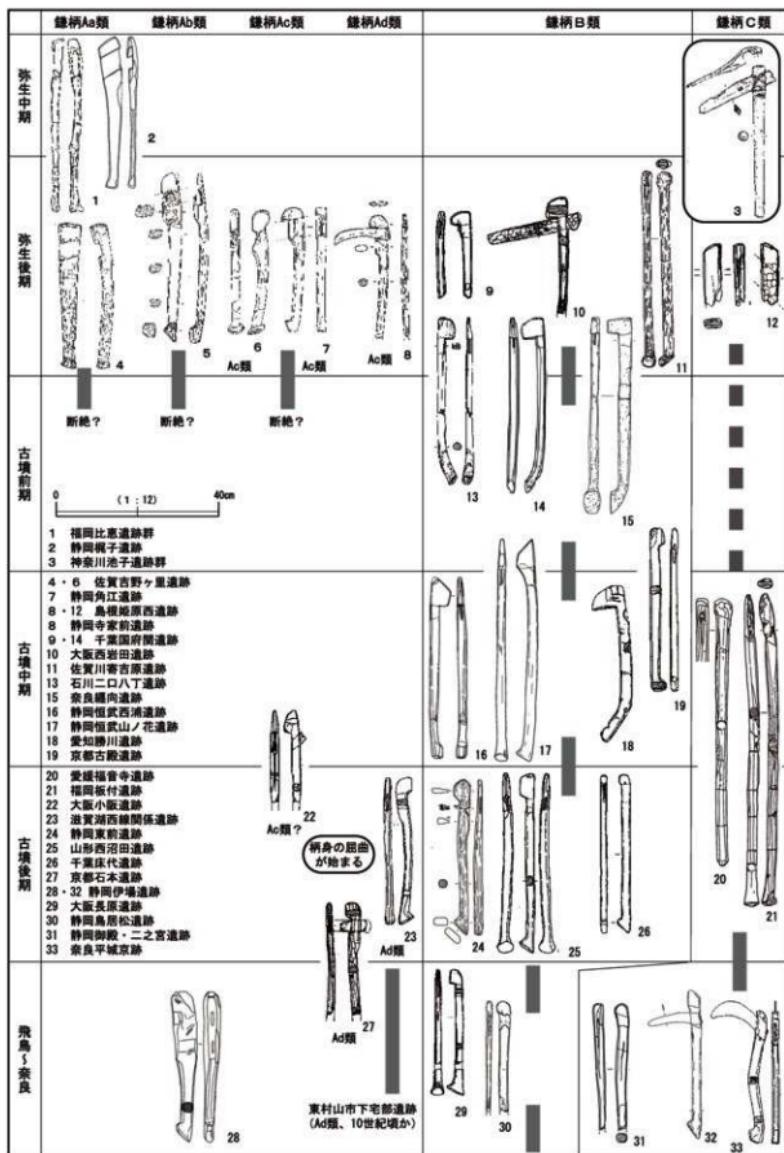


図7 日本列島における鎌刀挿入式鎌柄の編年的位置

## (2) 鎌柄の編年について

鎌は、弥生中期に曲刃鎌が出現し、古墳前期には短冊形鉄刃が盛行する中で、曲刃鎌は一部残存する。

一方、小論の分析により弥生時代の鎌を装着した鎌柄は、装着部を柄身よりも幅広につくるもの（鎌柄Aa・Ab・Ac類）と、柄頭のみを大きく作るもの（鎌柄B類）であることから（図7）、この2者に曲刃鎌が装着される。つづく、直刃鎌が盛行しはじめる弥生後半から古墳前期初頭に鎌柄B類が主体的に用いられるようになり、以後古墳後期までB類が主体的に用いられる。B類は時期が降るにつれて、徐々に柄頭と柄身の幅が同幅に近くなり、茎鎌が出現する中世まで連続と継続的に用いられた可能性が高い。C類は弥生時代から存在していた可能性が高い。弥生時代は大型の鎌柄に主に用いられ、通常の鎌柄へのC類の採用は古墳中期ごろに行われ、奈良時代には主体的に用いられた可能性が高い。古墳時代中期以降柄頭の幅が小さくなることやC類が盛行することは鎌柄全体が曲刃となる鎌が増加することと関連するとともに、鎌基部の折り返しの部位や角度を調整することで鎌の装着角度を自由に変えることができるようとする工夫で、鎌の形状と装着角度への柔軟性を増すためであったと想定できる。

ここで想像をたくましくすれば、日本独自の短冊形直刃鎌が創出された際に鎌柄の製作に手間のかかるA類は採用されず、鎌柄B類が組合され、それが直刃鎌の普及とともに全国的に普及した可能性も想定できる。また、弥生時代に主に採用されたAa・Ab・Ac類が一部残存し、古墳前期に確認された曲刃鎌は、それらに装着された可能性も考慮しておくべきである。

なお、韓半島の古墳時代併行期の三国時代～統一新羅時代の鎌柄（Jeong 2013, 金 2014）については、資料に掲載された鎌柄をみると、B・C類であり、初期鉄器時代に位置づけられる鎌柄はAa類のように看取できる。三国時代以降については日本列島と韓半島で同形態の鎌柄（B・C類）が利用されていたことが明らかである。韓半島と関連（連動）して、鎌柄の形態変化しているのか今後慎重に判断する必要がある。

## 【さいごに】

鎌柄の類例が少ない中で類似するいくつかの特徴から弥生時代後期とするのは強引な位置づけであるとの批判や、鉄鎌の形態的な特徴からは古墳時代中期以降に位置づけるべきという意見が寄せられることが予想される。今回は主に鎌柄の形態分類から寺家前遺跡例

を弥生時代後期に位置づけたが、今後の更なる類例調査を行うとともに調査の進展による類例の増加を俟って再度検証する必要があることはいうまでもない。多くの研究者の御教授・御批判を願います。

ただし、遠江・駿河は比較的鉄器の導入は遅れ、弥生時代後期以降本格化する可能性が高い（大谷2015）が、比較的古い段階で鎌柄が出土していることから、曲刃鎌だからといって鉄鎌が波及していかなかった証拠にはならないことも明記しておきたい。

## 【謝辞】

小論の執筆にあたり、石井智氏大、河野正訓氏、菊池吉修氏、鈴木一有氏、中川律子氏、林大智氏、樋上昇氏に類例や文献等、資料の位置づけなどについてご教示いただいた。銘記して深謝いたします。

## 註

- 1 中川律子氏は、問題提起をすること前提に、共伴した土器や遠江・駿河の木柄の類似例との比較から寺家前遺跡の柄付鎌を弥生時代後期に位置づけた（中川2011）ことから、筆者はこの問題提起に対し、筆者なりに位置づけを試みるものである。
- 2 弥生時代・古墳時代の研究者数名と寺家前遺跡の鉄鎌の位置づけについて立ち話をしたが、「弥生時代でよい」という意見と、「古墳時代中期以降ではないか」という意見が半々であった。このため研究者の同意を得るには、静岡県内をはじめ全国的な弥生時代～奈良時代ごろの柄付鎌の比較を行なったうえで寺家前遺跡例を位置づける必要があると感じた。
- 3 小論の分析には影響はないが今後の鎌の装着方法や使用用法を考える上で注目されるべきものであるため、ここに見解を示しておきたい。

寺家前遺跡の報告書では掲載されていないが、中川律子氏の論文（中川2011）に掲載された写真（写真4）をみると、柄付鎌の出土状況は、報告書等で図化されている鎌刃の装着が逆、つまり鎌柄はそのままの状態で切先が右側を向くように装着された状態で出土しているように看取できる。この見方が正しければ、鎌刃の装着が報告書等で図化された状態とは逆で装着されて実用的に使用されたとする見方と、廃棄される際に、機能を失わせるためか鎌刃を逆方向に差し替えて廃棄した可能性、あるいは中川氏が想定するように（中川2011）何らかの祭祀に使用する際に鎌刃を差し替えた可能性等が想定できる。

- 4 有東遺跡の木刀鎌の存在から、鉄刃鎌が駿河で使用されていたことが想定される（静岡県教委1983）が、弥生中期の鉄刃鎌は九州の設定されるような状況であり、近畿地方・東海西部を飛び越して駿河で普及していたかどうかについては慎重に検討する必要がある。
- 5 愛野向山II遺跡例については弥生後期に位置づけられ

- ることがあるが（杉山2011）、報告書（袋井市教委2004）では、古墳前期に位置づけている。
- 6 錪柄への取り付け方法は、装着孔に落とし込む場合を除いて、端部を折り返すことで錐柄に固定するが、固定する際に折り返す範囲などを調整することで、装着角度は自在に変化させられることが多い。一方で、柄頭が大きいものは装着角度を自在に変更することが難しいことが想定でき、より用途が狭まる可能性が高い。
- 7 これ以外に、D類の可能性のあるものが伊場遺跡、角江遺跡で出土しているが、柄頭が欠損している可能性があるため、判断が難しい。
- 8 当該事例は奈良時代に位置づけられている（浜松市博1978）が、伊場遺跡では弥生後期以降の木製品が出土しており、この錐柄が出土した箇所にも弥生時代の遺構が存在していることから、弥生時代の遺物が混在している可能性を排除できないため、本資料が弥生時代に位置づけられる可能性が残ることを記しておきたい。
- 9 池子遺跡例をみると、組合せ式の鉤の刃先を錐状に細く銳利に再加工したように看取できるため、鉤を転用したものである可能性も考えられる。
- 10 吉野ヶ里遺跡の報告書（佐賀県教委2003）では、惣利遺跡のほか、吉野ヶ里遺跡のAa類と同様の形態として佐賀県土生遺跡・生立ヶ里遺跡などが挙げられており、北部九州ではAa類が一般的であったことが想定できる。
- ただし、これらのAa類について、比恵遺跡群（福岡市教委1991）や惣利遺跡の報告書では「錐柄」ではなく「工具」柄（の可能性がある）としている（福岡市教委1991、夜須町教委1997）。直接比較するには危険性が伴うが、弥生時代の袋状鉄斧柄（組合式椎斧柄）や板状鉄斧柄とされるものは錐柄Aa類やAb類に類似する形状のものがある。Ab類は大阪府龟井遺跡出土例（岡村1985）、佐賀県吉野ヶ里遺跡出土例、Aa類は巨摩・瓜生山遺跡出土例（岡村1985）に類似している。錐柄に比べて、装着孔の幅が大きいという特徴は確認できるが、手に持つて回転させて（遠心力）で切るという動作をするものとしての共通性があると判断すれば、錐柄と斧柄（椎斧柄）の形状が類似していることも十分想定可能である。したがって、Aa・Ab類に斧柄が含まれる可能性はあるものの、錐柄Aa・Ab類は弥生時代の形状として考えて差し支えないと考える。
- 11 田中谷遺跡例は、柄頭が一部欠損している可能性がある。
- 12 神奈川県池子遺跡例や、遠江・駿河の事例、吉野ヶ里遺跡等の事例あるいは千葉県国府関遺跡等の一体造りの鍼をみると、弥生時代に位置づけられるものは、錐刃挿入式は錐刃を鋭角に取り付けられるよう装着孔を穿孔し、一体造りのものは錐刃を鋭角に取り付けているものが多い。韓国光州新昌洞遺跡例（Jeong 2013）に掲載された初期鉄器時代に位置づけられるものも鋭角に取り付けられるような穿孔形態であることから、弥生時代の「通常の錐柄」には角あるいは直角に取り付けられるもののが多かったことが想定できる。
- 13 東京都東村山市下宅部遺跡については、報告書を確認することができず、東村山市のホームページで写真を確認した。写真を見る限り、背側に向かってやや湾曲し、装着部を幅広につくられることから、ここに示したようにAd類に位置づけられる可能性が高い。

## 引用・参考文献

### 【主な論文・資料集】

- 伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学』出土木製品用材データベース 海青社
- 上原真人 1993 「錐」「木器集成図録 近畿原始篇」奈良文化財研究所
- 上原真人 1994 「西日本の農具の変遷」「古代における農具の変遷」静岡県埋蔵文化財調査研究所ほか
- 大谷宏治 2015 「遠江・駿河における木製品からみた鉄器化の様相」「考古学研究会東海例会2015年2月資料 木製品からみた鉄器化」考古学研究会東海例会
- 岡村秀美 1985 「鉄製工具」「弥生文化の研究」5 道具と技術 I 雄山閣
- 櫻井考古学研究所 2000 「大和木器資料 I」
- 川越哲志 1977 「弥生時代の鉄製収穫具について」「考古論集—慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集—」松崎寿和先生退官記念事業会
- 河野正訓 2011 「古墳時代前期の曲刃鍬」「古文化談叢」66 九州古文化研究会
- 河野正訓 2014 「古墳時代の農具の研究」雄山閣
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所ほか 1994 「古代における農具の変遷」
- 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006 「島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成」
- 杉山和徳 2011 「東海地方の鉄器の出現」「研究紀要」17 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 杉山和徳 2012 「東海地方の鉄器化の様相」「静岡県考古学研究」43号 静岡県考古学会
- 竹内直文 2000 「弥生時代の遺構と遺物」「県道浜松袋井線緊急地方道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」磐田市教育委員会
- 武田寛生 2003 「東海地域における後期古墳出土農工具について」「研究紀要」10 静岡県埋蔵文化財調査研究所寺澤 薫 1991 「収穫と貯蔵」「古墳時代の研究」4 雄山閣
- 都出比呂志 1989 「農具鉄器化の諸段階」「日本農耕社会の成立過程」岩波書店
- 中川律子 2011 「藤枝市寺家前遺跡から出土した柄付き鉄製鍬について」「研究紀要」17 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 奈良文化財研究所 1993 「木器集成図録 近畿原始篇」
- 平野吾郎 1994 「椎刈り鍬の出現」「地域と考古学」向坂剛二先生還暦記念論集刊行会
- 福辻 淳 2013 「灘向遺跡の木製飯面と土坑出土資料について」「灘向遺跡研究」1 桜井市灘向町研究センター
- 松井和幸 1985 「鉄鍬」「弥生文化の研究」4 雄山閣
- 松井和幸 1993 「鉄鍬について」「考古論集—潮見浩先生退官記念論文集—」潮見浩先生退官記念事業会

- 松井和幸 1994 「鉄製農具の変遷」『古代における農具の変遷』 静岡県埋蔵文化財調査研究所ほか
- Jeong su og 2013 「古代韓国の木製品出土の現状と種類」『韓日古代木製造物の研究成果と今後の課題』 国立昌原文化財研究所(ハングル)
- 金度蕙 2914 「韓国の三国時代農器具」『武器・武具と農工具・漁具』 国立釜山大学校博物館
- 李健茂・李榮勳ほか 1989 「義昌茶戸里遺跡発掘調査報告(1)」『考古学誌』1 韓国考古美術研究所(西谷正監訳)1990 「義昌茶戸里遺跡発掘調査進展報告(1)」『考古学誌』1 韓国考古美術研究所(西谷正監訳)1990 「義昌茶戸里遺跡発掘調査進展報告(1)」(西谷正監訳)1990 「義昌茶戸里遺跡発掘調査進展報告(1)」(西谷正監訳)
- 浜松市博物館編 1998 「山ノ花遺跡」木器編
- 浜松市博物館編 2002 「伊場遺跡遺物編」(木製品Ⅱ・金属器・骨角器) 浜松市教育委員会
- 浜松市博物館編 2004 「大浦村東Ⅰ・Ⅱ遺跡」
- 浜松市博物館編 2008 「東前遺跡Ⅱ」
- 福岡市教育委員会 1991 「比恵遺跡群(10)」
- 磐田市教育委員会 2004 「愛野向山II遺跡」
- 藤枝市史編さん委員会 2007 「藤枝市史」資料編1 考古古
- 鯛江町教育委員会 2005 「岡の平遺跡発掘調査報告書」
- 森町教育委員会 1996 「森町飯田の遺跡」
- 夜須町教育委員会 1997 「惣利遺跡I(図版編1)」

#### 【主な報告書・市町村史】

- 浅羽町教育委員会 1999 「五ヶ山B2号墳」
- 磐田市教育委員会 1995a 「遠江堂山古墳」
- 磐田市教育委員会 1995b 「御殿・二之宮遺跡第6次発掘調査報告書」
- 磐田市教育委員会 2003 「県道浜松袋井線緊急地方道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 掛川市教育委員会 2003 「掛川市長谷土地区画整理用地内遺跡発掘調査報告書II」
- かながわ考古学財団 1999 「池子遺跡群X No.1-A地点」
- 菊川町教育委員会 2004 「長池古墳群4号墳発掘調査報告書」
- 後藤守一 1939 「松林山古墳発掘調査報告」
- 佐賀県教育委員会 2003 「吉野ヶ里遺跡」
- 静岡県教育委員会 1983 「東遺跡」I下
- 静岡県教育委員会 2001 「静岡県の前方後円墳」
- 静岡県埋蔵文化財センター 2012 「守家前遺跡I」
- 静岡県埋蔵文化財センター 2013 「守家前遺跡II」
- 静岡県埋蔵文化財センター 2014a 「守家前遺跡III」
- 静岡県埋蔵文化財センター 2014b 「守家前遺跡IV」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988 「大谷川(稻葉地区)」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994a 「瀬名遺跡III」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994b 「川合遺跡」 遺物編3
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995a 「長崎遺跡IV」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995b 「池ヶ谷遺跡III(遺物編)」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996a 「角江遺跡II」 遺物編2(木製品)
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996b 「瀬名遺跡V」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000 「恒武西宮・西浦遺跡」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009 「菊川市下平川の遺跡群」
- 島根県教育委員会 1999 「姫原西遺跡」
- 内藤晃・大塚初重編 1961 「三池平古墳」
- 浜北市 2004 「浜北市史」資料編 原始・古代・中世
- 浜松市教育委員会 2009 「鳥居松遺跡5次」
- 浜松市教育委員会 2012 「梶子遺跡13次」
- 浜松市博物館 1978 「伊場遺跡遺物編I」
- 浜松市博物館編 1997 「梶子北遺跡」木器編
- 浜松市博物館編 2002 「伊場遺跡遺物編」(木製品Ⅱ・金属器・骨角器) 浜松市教育委員会
- 浜松市博物館編 2004 「大浦村東Ⅰ・Ⅱ遺跡」
- 浜松市博物館編 2008 「東前遺跡Ⅱ」
- 福岡市教育委員会 1991 「比恵遺跡群(10)」
- 磐田市教育委員会 2004 「愛野向山II遺跡」
- 藤枝市史編さん委員会 2007 「藤枝市史」資料編1 考古古
- 鯛江町教育委員会 2005 「岡の平遺跡発掘調査報告書」
- 森町教育委員会 1996 「森町飯田の遺跡」
- 夜須町教育委員会 1997 「惣利遺跡I(図版編1)」

#### 図の出典

- 図1 寺家前遺跡(静岡県埋文センター2013)、角江遺跡(静岡埋文研1996a)、
- 図2 1 (静岡県埋文センター2013)、2 (静岡県教委1983)、3 (森町教委1996)、4 (磐田市教委2003)、5 (静岡埋文研1994b)、6 (袋井市教委2004)、7・8 (浜北市2004)、9 (静岡県教委2001)、10 (掛川市教委2003)、11・12・14 (静岡埋文研2009)、13 (磐田市教委1995a)、15 (浅羽町教委1999)、16 (菊川町教委2004)、17・18 (藤枝市2007)、19~23・26・27 (静岡埋文研ほか1994)、24・25 (浜松市博2002)、28 (静岡埋文研1994a)
- 図3 1~10 (河野2011)
- 図4 有東遺跡例(静岡県教委1983)、角江遺跡例(静岡埋文研1996a)、寺家前遺跡例(静岡県埋文センター2013)、滋賀湖西線関係遺跡(奈文研1993)、恒武山ノ花遺跡例(浜松市博1998)、大宰府跡(松井1993)、姫原西遺跡例(島根県教委1999)、櫛向遺跡例(福辻2013)
- 図5 1 (浜松市博2002)、2 (鯛江町教委2005)、3 (静岡県教委1983)、4 (静岡埋文研1996a)、5 (浜松市博1978)、6 (静岡県埋文センター2013)、7 (静岡埋文研1994b)、8 (静岡埋文研2000)、9・10 (浜松市博1998)、11 (浜松市博2008)、12・13・18 (浜松市博2002)、14 (浜松市博2004)、15 (浜松市教委2009)、16・17 (磐田市教委1995b)、19 (静岡埋文研1994a)
- 図6 1・2 (福岡市教委1991)、3・4 (佐賀県教委2003)、5 (島根県教委1999)、6~8・10・12・13・16~18・22~25 (奈文研1993)、9・14・19~21 (静岡埋文研ほか1994)、11 (島根県古代文化センター他2006)、15 (福辻2013)、26 (松井1993)、27 (島根県教委1999)、28 (かながわ考古学財团1999)
- 図7 1 (福岡市教委1991)、2 (浜松市博2002)、3 (かながわ考古学財团1999)、4・6 (佐賀県教委2003)、5 (静岡埋文研1996a)、7・12 (島根県教委1999)、8 (静岡県埋文センター2013)、9・13・14・25・26 (静岡埋文研ほか1994)、10・11・18~23・27・29 (奈文研1993)、15 (福辻2013)、16 (静岡埋文研2000)、17 (浜松市博1999)、24 (浜松市博2008)、28・32 (浜松市博1978)、30 (浜松市教委2009)、31 (磐田市教委1995b)、33 (松井1993)

静岡県埋蔵文化財センター  
**研究紀要 第4号**

2015年10月1日

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター  
〒422-8002  
静岡県静岡市駿河区谷田23-20  
TEL 054-262-4261

印 刷 みどり美術印刷株式会社  
〒410-0058  
静岡県沼津市沼北町2-16-19  
TEL 055-921-1839

